
通りすがりの恋人

内海 さくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

通りすがりの恋人

【Nコード】

N4684I

【作者名】

内海 さくら

【あらすじ】

両親の突然の死から、家業を継ぎ弁当屋の店長になってしまった麻衣。

ある日、配達中に出会った見知らぬイケ面男性から突然告白され、雰囲気のにまれてしまった麻衣の心に恋心が芽生え始める。

……しかし…。

第1話 「はじまり」 (前書き)

小説を書くのは、ど素人ですが頑張ります。ゆっくり、のんびり更新予定

<登場人物>

栗本 麻衣くりもと まい

弁当屋店長 恋人いない暦20年 真面目で優しい 一生懸命だが、空回りすることも多い。

田中 幸たなか さち

麻衣の高校時代からの親友。カクテルバーである『cocktail glasses』という店で働いている。明るくさっぱりした性格。

第1話 「はじまり」

「店長！配達の注文が入りました。日替わり弁当 2、竜田揚げ弁当 1、
イタリアンハンバーグ弁当……」

「店長！注文はいりました。から揚げ弁当とトンカツ弁当と……」

「はい！」

「店長！」

「はい」

曇々と忙しさを頭がくらくらする。

自分があとふたりいたらどんなにいいかと思う。

目の前で生きたように跳ねる油と格闘しながら、麻衣は額に流れる汗を拭いた。

ここは、会社や映画館、劇場などがずらりと並ぶ街角の一角にある小さな弁当屋。

ほんの数週間前までは、麻衣の両親が切り盛りしていた。

お店の手伝いなどまったくしたことがなかった。

大学でのバイトなんて、ファミレスや居酒屋の店員で注文取るくらい。

親から何度となく手伝えと言われたが、こんな割烹着のおばさんのような格好、

汗だけで休日もなく遊べもしないこんな仕事したくもなかった。

特に将来を考えることなく、気のままにやっていた大学生活。

だが、そんな甘過ぎる生活は、両親の急死であつという間に壊れてしまうことになる。

麻衣の両親は、2週間前交通事故で亡くなった。

悲しみに浸る間もなく、麻衣に店の借金、
まだ高校と中学に行っている姉妹の学費、生活費など現実が降りか
かってきた。

結局は、無意味に行っていた大学を辞め、
母親の親友でもある弁当屋のおばさん従業員に引きずり込まれるよ
うに

弁当屋を受け継いだ。

もちろん、店長とは名ばかり、下働きである。

「じゃ、配達行ってきます！」

麻衣は、弁当が入ったビニール袋を両手に抱えると、弁当屋を後に
した。

第2話 「出会い」

今日は、配達、2件だけ。

店を始めた頃はビルも今ほど少なく、小さな会社ばかりであったという。

だが、いつしか街は大きくなり
ビル郡がまるで山のように建ち並び始めると、配達ばかりに追われるようになり…。

結局、冷凍物を使わず手作りのお弁当を提供し続けたかった両親は配達を止め、

店頭販売を中心にした…と母の親友の本田は言っていた。

だから現在、配達はオフィス街がお休みの日曜日のみである。

麻衣は、弁当屋から2、3分歩いた

一面緑の芝生と木々が生い茂る公園の中でふと足を止めた。

「食べてる。食べてる」

さっき、店に来たカップルが、公園のベンチに座りお弁当を頼張っている。

彼女が自分のおかずを箸で取り彼氏へ食べさせると、
なんだか恥ずかしくなって…目を背けた。

ちょっぴり、いいなと思う。

人に言えないが、この歳になっても麻衣には彼氏という存在がいなかった。

もちろんKISSだって……ささやかな妄想の中だけ。

「気を取り直して、配達！」

麻衣は、気合を入れ直し歩き始めた。

公園の隣、生い茂る木々の隙間からは、
1年前に出来た大きく綺麗な劇場が見えている。

本田の話では、毎週土日は入場のために人が列を作り、
チケット自体もなかなか取れない劇があっているのだと。
何があっているのかと訊ねても、「なんとか」という劇でね。
アクロバットっていう人もいれば、演劇だと言う人もいれば、
お笑いだと言う人もいる」と、いまいち統一性がない説明を受けた。

劇なんて麻衣自身もあまり興味のない世界。

7、8千円ものチケット代を出すよりも新しい流行の服が欲しい。
それが切実な思いであった。

今日も、その人気の「なんとか」があるらしい。
まるで蟻の行列のように劇場から公園入り口の近くまで劇場に入る
人並みが続いていた。

突然、女性達の黄色い声が湧きあがるのが遠く聞こえた。
日曜の静かな公園に、その声だけが、異様に響き渡る。
ベンチに座っていたカップルも食べるのを止めてその声のほうに視
線を向けたくらいだ。
麻衣も同じ方向に視線を移しては見たが、
見えるのは、あちこちに点在するカップルと木々の緑だけ。

「いけない。早く行かなきゃ」

ボンヤリとしていた自分に気付き、ゆっくりと進めていた脚を気持ち早める。

すると。

「ちょっと、キミ。走って！」

「は？」

視界隅に黒っぽい影が見えたかと思うと、低音の張りのある声が聞こえた。

同時に腕をグツと掴まれ。

相手の顔を見る暇もなく、麻衣の意思を全く無視するかのよう**に強く引つ張られ**
公園の奥へと向きを変えられたのだ。

「な、なにをするん…ですか」

男性の背中を見ながら、頭の中は、最悪な状況ばかりがグルグルと

回っていた。

この男は強盗で、たいしたお金を持ってないと知ったら、殺すんじゃないかと。

この不況、金がないなら弁当をと持っていかれるかもしれない。

「う…強盗…、いや、べ……弁当」

「何？心配しないで黙ってついてきて」

麻衣の呟きのような悲鳴に気付いた男性が振り返り、言葉を掛けた。眩しさで顔が分からないのは、彼が自分よりもはるかに身長が高いためであることに気付く。余計に怖くなった。

「たすけて。べ…弁当泥棒！」

搾り出すような声がやっと出た。「ここで殺されたら、残された家族は。」

「弁当でもなんでもあげるから。殺さないで！！」

その言葉は、男にも、そして、周囲で戯れるカップルにも聞こえた

らしい。

刺す様な視線がいたるところから向けられ、
そして、掴まれている腕がギリリと捻られるように痛んだ。

「ばか！勘違いするな」

そう言うと、男は公園の小道からわき道にそれた。

林の奥には小さな人工池があり、お昼の太陽を浴びてキラキラ光る。
林の中はちよつと薄暗いため池だけがやけに明るく見えた。

その人は、何かから逃げているようにもみえ……。

林に入ると安心したように歩を緩め、
ポケットから眼鏡を取り出すとそれをゆっくりとかけた。

視線は、さっきまで走っていた遊歩道へと向けられる。
ようやく顔が分かり、麻衣は息を止めた。

か、かっこいい！

大きな瞳をちよつと隠すような茶色い前髪、スツと伸びた鼻筋に引き締まった唇。

そして、首筋からシャツから垣間見える胸元。

そのイタリアの有名彫刻のような線は、
計算しつくし創られたかのような筋肉で出来ていた。

生身の人間でなかったら、きつと触れていたかもしれない。

この20年間で初めて…だと思う。

こんなにかっこいい人と会ったのは。

そんな麻衣の熱い視線に気が付いたのか、遠い視線がゆっくりと降りてきた。

そして、彼はこう言った。

「恋人になって」

第3話 「通りすがりの恋人」

「恋人になって……」

麻衣は、驚きで全身が硬直した。

生まれて初めての告白。

そして、こんなかつこいい男性と接近しているなんて。

そんな状況に、言葉さえも出ないくらいに力チ力チに固まったのだ。

夢だと思った。

名も知らぬ男性から、ゆっくり引き寄せられて抱きしめられても、これが現実のことだなんて脳は理解出来るはずはない。

いつしか、強盗だと思ったことも頭からなくなっていた。

彼の身体の温度を感じると麻衣は、ゆっくり目を閉じる。

厚い胸板に顔を預けると、硬直していた体から

全ての力が抜けていくのを感じ、胸がジンと暖かくなった。

これって恋？

……にしてはあまりも早すぎる事くらい分かっている。
自分の惚れっぼさに驚いた。

バサバサバサ……そんな音が遠く聞こえて。

女性達の遠くざわめく声が、そよ風のように通り過ぎていった。

どのくらい時間が経っただろう。長い時間が経ったように思える。

麻衣は我に返り、顔を上げた。

男性のかっこいい顔が、すぐ間近に見え、胸の鼓動が狂ったように
鳴り始める。

彼の黒い瞳が自分の瞳に降りてくると、目が柔らかく細まった。
まるで、いたずらっ子が笑うみたいに。

「いいの?」

なんのこともなにか分からなかった。

この抱き合った状態で「いいの?」なんて言葉が持つ意味を探す。ちよっぴりだけど変な素人妄想を抱いた。

「お弁当……崩れちゃってるけど?」

「えっ?」

麻衣の手には、何の重みも感じていなかった。

ビニールの取っ手が食い込んでいる感触も。それでようやく気が付いたのだ。

さっき耳に聞こえてきた音が何であつたかを。

「お弁当。 ああっ!」

愕然とした。

さっきまで、しっかり手元にあった配達用のお弁当は地面に落ち、運が悪いことに倒れていたのだ。もちろん、中身はバラバラになっていた。

ハンバーグソースの香りがプンと匂うと、背筋にぞわぞわと虫が上がってくるような感覚が走り、氷のように体が冷たくなってゆく。

「どうしよう、配達のお弁当が。どうしよう」

腕時計に視線をやると、涙が溢れそうになった。

配達の間はとっくに過ぎ、店に帰り作り直す時間などなかった。電話でお店に連絡することも考えたが、携帯主流のこのご時世、どこを見回しても電話ボックスの姿は見えない。

「どうしよう、どうしよう」

「それ、配達用なの？君もしかして弁当屋？」

麻衣の様子を見ていた男性もその異様な変化で、怪訝そうな表情に変わっていた。

問いかけにも答えず、パニックになり弁当の残骸を拾う麻衣の腕を掴むと

強く揺すった。

「おい君！携帯は？」

「え？」

「携帯だよ！」

「携帯なんて持ってない」

「どうして持たないんだ。配達中、何が起こるか分からないだろう」

「あなたが悪いんじゃない。突然、抱き……。あんなことどうしてしたのよ」

抱きしめたんじゃないという言葉をおうとして恥ずかしくなり、麻衣はそっぽを向いた。

あんなことされなければちゃんと配達は出来たのに、
そう思いながらも、完全拒否できなかった自分にも十分に非はあり、強くも言えなかった。

「い、ごめん」

謝りながら、失敗したという表情が彼の顔色に濃く出てくる。

「…僕のファンから逃げるために」
「ファン？」

冗談！芸能人であるまいし、何がファンだと思った。
何様よという気持ちを込めながら、きつと睨んだ。

「ん……そうだな。簡単に言うと、
僕に好意を持ってくれる女性達をまくために、
通りすがりの君に恋人のふりをしてもらったと言つこと」

「恋人のふり？」

「そう、”ふり”。ほら、早く店に電話しないと、
お客に迷惑かけるんじゃない？」

男性は、軽く答えながら黒の携帯を取り出し、麻衣に電話番号を聞いてきた。

麻衣は、呆然としながら質問の問いに淡々と答えてゆく。

夢よりも最悪な現実だった。

恋心にも似た感覚も、初めての男性の温もりも
なんだか侘^{わび}しいものとなっていった。

マリオネットのように踊らされ、
拳句の果てにポイと捨てられたような気持ちになり、
浮かんでいた涙がポロリと流れた。

彼は、麻衣に背を向け携帯で弁当屋に電話をしている。

麻衣は、弁当の残骸が入ったビニール袋を持つと、彼に背を向け歩き始めた。

当然のことながら、男性は麻衣を呼びながら追いかけてきた。

「弁当屋には事情を話したから、新しいものを配達しておくって。
これ弁当代…それと汚れた手を拭きなよ。君？」

「いらない！絶対受け取らないわ。触らないで！！」

手渡されそうになったお金とハンカチをパチンと跳ね除ける。
お金は弁当の弁償代だと分かっているにも、受け取りたくなかった。
自分を弄んだ詫^わび賃にも思えたから。
悔しくて悔しくてたまらず、この男性に流れる涙なんか見せたくな
かった。

自分は馬鹿だと思った。
冷静に考えれば、有り得ない事なのだ。

かっこいい男性が、突然恋人になりたいだなんて。

いよいよに弄さわばれて本気になった自分が嫌きらになった。

第4話 「忘れられない恋心」

「どつしたのよ？麻衣。そこまで怒らなくっていいじゃない」

「おかわり！！」

出されたカクテルをグイッと飲み干すと、グラスをカウンターに置いた。

幸は、ため息をつきながらそのグラスを受け取る。

適当に作るわよと言いながら、シェーカーに氷をカラカラと入れた。

「飲みすぎ。ソーダーを多めに入れておくから」

「そんなもの入れなくていい！今日は飲みたい気分なの。

飲ませてよ！お金はちゃんと払うからもつと愚痴言わせて！」

「もうちょっと、声を落として。一応ここはお洒落なバーなんだから」

幸は、呆れながらウオッカのビンを手を取った。

お酒なんて、何ヶ月振りに飲んだだろう。

両親が死んだ後だって酒に逃げることなどせず、真面目に働いてきた。

仕事に慣れず怒られた時も、愚痴なんて言ったことはなかった。

でも今日は、あの男に振り回され、店の信頼を失ったのだ。

本田が気転を利かせてくれたお陰で、客を失わずにはすんだけど。

「全ては、あの自意識過剰男のせいよ」

そう言う度、昼間の男性の姿が頭の中に浮かんでくる。

整った顔立ちと、厚い胸板……そして温もりまでもリアルに思い出し頭をブンブン振った。

「はいはい、麻衣の仰るとおり！」

でも…そう付け加え、高校からの親友、幸は興味深そうに言葉を続けた。

「身の硬いあんたをボロボロにした男をちょっと見てみたかったわね。

だって、合コンしたって1次会で帰るって言い出すし、ダブルデートをセッティングしてやっても男子と1メートル以内に近寄らないんだもん……そんなあんたが、出会ってすぐの男子と抱き合う姿なんて想像できない」

「抱き合うなんて……言わないで！」

アルコールのせいじゃなく、顔が火照り、心臓の鼓動が音を立てて鳴り響く。

そんな状態の麻衣の心を見透かしているかのように、幸は言った。

「仕事の鬱憤は晴らせても、

アルコールの力で恋したことを忘れることなんて出来ないわよ」

「恋したこと…ね」

ため息が出てくる。

確かに、恋したことを忘れることなんて出来ないだろう。

今日はたくさん飲んで、明日朝には綺麗さっぱり忘れるつもりで来たのに。

「まつ、恋人のフリってのは最低だけど、弁当が駄目になったことを麻衣が悪くないようにうまく取り繕ってくれたんでしょ。その男、優しいところもあるじゃない？」

「どこが優しいの！当たり前よ」

ガラスが空になり、再び幸に催促する。
頭がくらくらして幸の顔もぼやけてきたが、意識はまだまだアルコールを欲していた。

「自意識過剰男！女の敵……」

何杯目かも分からないグラスを受け取ると、口をつける。
まるで、昼間の男を彷彿させるような甘い香りが鼻腔いっぱいに広がっていった。

第5話 「勘違い」

次の日は、激しい頭痛と気分の悪さに襲われていた。

揚げ物との格闘に負け、厨房から追い出された麻衣は外掃除へと回される。

午前中は来客も少ない。

竹箒を掃く手をときどき休めながら
お昼の稼ぎ時のため、気力と体力を回復していた。

「はあ、頭いたい」

酒の飲み過ぎに後悔しながら、箒はしの柄に頭をつけると視線は自然と、道路奥におい茂る公園の林へと止まる。
ふと、昨日の出来事を思い出す自分に気が付き
頭をブンブンと振った。

「はあ〜」

もう、何度同じことを繰り返しているのだろう。

何かに取り憑かれたかのような自分らしくない自分がいるのは自身でも分かっていた。

何かについて何？

……なんて探るだけ野暮な話。

だが、名も知らぬ初対面の男に本気で恋をしているなんて嫌でも自覚したくなかった。

考えない。考えない

麻衣は、再び箒を動かし始めた。

俯き加減で、黙々とタバコの吸殻、紙くずを寄せて掃いていく。すると、麻衣の視界の中、歩道のアスファルトに茶色い革靴が現れて。

その革靴は、箒を避けることなくそのまま立ち止まった。

「おはよう」

低音の心地よい声が耳に響いた。

脳は、すぐさま声の主を突き止め、ドキドキと麻衣の心臓をあおらせた。

「お、おはようございます」

やはり、昨日公園で出会った男性だ。

高級そうなネイビーのスーツに身を包んだ彼は、昨日のカジュアルっぽさと全く違う雰囲気を見せていてすごくカッコいい。

だが、心の動揺を知られたくない麻衣は

わざと眉間に皺をよせ、上目遣いに見上げた。

そんな麻衣の乙女心など全く知らない男性は顔をよせ

まるで、子供が宝物を見つけたかのような表情でにっこり微笑んだ。

「……やっと見つけた」

「えっ」

そんな表情で、そんな言い方しないでよ！

と、麻衣は心の中で訴えていた。
彼のひと言ひと言が胸の中に入り込んできてはハートを動かすのだ。
苦しくてたまらなかった。

「……君の弁当屋こんなに近くだったのか」

「はい、そうですけど。お弁当を買われるのなら、中のカウンターの方でどうぞ」

どこまでも気がない素振り、素っ気無い態度で頑張る。
でも、顔は引きつっているかもしれない。
彼は右手をゆっくり振りした後「弁当は次回買わせてもらおうよ」と、
答えた。

「今日は、お詫びに来たんだ。
昨日は、配達用の弁当を駄目にしてすまなかった。
あれから大丈夫だった？」

大丈夫と言うのは、お客のことだろう。

弁当もそうだが、自分の方に謝って欲しいと思った。

『弄んでゴメン。大丈夫だった？』

…と。

だが、彼の口からそんな言葉が出ることはない。
ゆっくり頷くと集めたゴミを塵取りに集め、男性に一礼した。

「じゃ、仕事が忙しくなるからこれで。さようなら」

さようならば、自分の気持ちとの決別のつもり。
これ以上、この男に自分の身边をウロウロされたら
本当に忘れられなくなりそうであった。

だが、そんな麻衣と正反対に男性は呼び止めた。

「さようならじゃないだろう？君はお金を受け取らなかったけどそんなことバイトの一存で判断出来ることじゃないじゃないか。店長はどこ？僕が話すから」

「えっ、バイト？」

完全なる勘違い。

彼は、自分をバイトの子だと思っているのだ。

まあ確かに、どこをどう見ても、店長に見えないだろう。

昨日は私服で配達していたし、今日は割烹着姿、竹箒で清掃中だ。

この男性の上流階級っぽい姿と街角の小汚い店の自称店長の麻衣とは大きな差がありすぎた。

なんだか、自分の身分を言ってはいけないような気持ちになりながら自信なさげな口調で麻衣は言った。

「いちおう……だけど。判断できるの。…私が店長だから」

驚いたのだろう。

男性のガラス玉のような瞳が大きくなった。

第6話 「おまじなら、通りすがりの恋人」

「店長が、君？」

「本当に？」

「……」

目尻が裂けんばかりの瞳が、キュッと細くなる。
一瞬の沈黙の後、彼は噴出すように笑い始めた。

「いめん。いめん」

呆気に取られている麻衣をよそに笑い袋のスイッチでも押したかの
ように、
笑い続ける彼。
心に灯っていた温かい火も、彼の爆笑を見るうちにみるみる冷めて
いく様であった。

「店長には、見えないと思うけど…そんなに笑わなくてもいいじゃ
ない」

「ごめん、笑うつもりじゃなくて」

「笑ってる」

さすがにムツとした口調が相手に伝わったのだろう。
男性は、息を整えると再びゴメンと謝った。

「昨日さ、両手に大きな弁当袋を抱えて歩く姿の君が
すごく滑稽こっけいでね。まるで、お使いを頼まれた子供のように見えた。
そんな娘こが店長だなんてちょっと驚いたんだ。すごいな」

細くて綺麗な指を持つ大きな掌が、
ポンポンと2回麻衣の頭を優しく叩く。

子ども扱いされたことは思いつきり腹立つが、
まるで恋人同士のようなこのシチュエーション、悪い気はしなかつた。

冷ややかになっていた心が再びジンとあつたかくなる。

彼の態度は、あまりにも自然すぎた。

もしかしたら、気持ちを上げ下げするこの彼の行為は計算で、
女性のハートを掴むテクニクなのかもしれないとも思った。
実は、結婚詐欺だとか。

このボロくて借金まみれの弁当屋を乗っ取るとか？

……あり得ないけど。との結論に簡単にたどり着いたけど。

「あのー、これでいいでしょう？ 私は店長、
お詫びはしてもらったんだし、お金は受け取らないと言う事で。
もう、昨日のことは無しにしましょう」

全ては無しで

昨日の彼のぬくもりも、何もかも無しになるのはちょっと寂しい」
とだが、
これ以上ズルズルと引きずるのはよくないと思った。
あくまでも昨日の出来事は事故のようなものなのだ……。
つかの間の恋人の”フリ”だったのだから。

男性も納得してくれたようだ。
大きく頷くと分かったと言ってくれた。
そして、胸の内ポケットから長方形の紙を取り出し、
枚数を数えると麻衣に手を出すように言った。

「これ、あげるよ」

彼の温かな手から、麻衣の掌に紙が渡される。
それは、「monster」と書かれたチケットであった。

あの公園横の劇場。

そして、小さく書いてある値段を見て驚いた。
全部の値段を合わせれば数万円の代物なのだ。

「こんな高いもの」

「受け取らないなんて言わないでくれよ。
僕はそのチケットくらいは自由に手に入る。
ほんのささやかなお詫びのしるしだから。じゃ、さよなら」

そう言うと、くるりと踵を返した男性は、右手を挙げ挨拶し歩いていく。
彼の背中が次第に離れてゆくと、これで全てが終るのだと麻衣は実感した。

「あ、そうそう、ひとつだけ」

20歩ほど歩くと彼は、くるりと振り返った。
姿は小さくなるが、声量は大きい。

「君の名前教えてくれる？」

男性は、大きな通る声で、ついでのように麻衣の名前を聞いてきた。麻衣は、身体を乗り出すように腹の底に力を溜め声を出した。

「私は、栗本 麻衣！あ、あなたは！！！」

かろうじて聞こえたようだ。

ついでに…ではなかったが、彼の名前も聞いてみた。

「…いつ分かるよ」

小さくそう聞こえた。

麻衣は、いつのまにか落としてしまったゴミに気が付き、箒で集めた。
彼の掌の温もりがまだ麻衣の手に残っている。

「私の名前だけ聞いて…最後まで、ひどい奴……」

なんだか、涙が出てくる。
でも、もう未練なんか残せなかった。

「……さようなら、通りすがりの恋人」

そう呟いた。

第6話 「おようなら、通りすがりの恋人」 (後書き)

まだ、終わりません〜ので。まだまだ続きます

第7話 「深まる謎」

その日、弁当屋は違う意味で盛り上がってしまった。

「monster」の劇場チケットを、麻衣が持ち帰ったからである。

それは、本田が言っていた『なんか』。

『アクロバットっていう人もいれば、演劇だと言う人もいれば、お笑いだと言う人もいる』

と言っていたあの劇だ。

7、8千円というのは安い方で、それよりも高い席があるというところに

弁当屋の従業員達は驚いていた。

「テレビであってたんですけど」

いつも、おばちゃんたちに圧倒されオドオドとしている
オタクっぽいアルバイト店員が、ここぞとばかり話し始める。

「monster」は簡単に言うと、

少林寺道場を舞台にした老師・師匠・その弟子たちと、
道場破りにきた悪役三人組の、笑いあり涙ありの
ハチャメチャ騒動のパフォーマンス劇であり、
全てはノンバーバルコミュニケーションだ……

と、彼は説明した。

「ノンバなんとかって」

本田得意の何とかが始まる。

「辞書的答えなら、非言語コミュニケーションのことです」

「声なしで1万円は高いでしょうか？損した気分」

本田の意見に麻衣も大きく頷く。

だが、バイトの子は、指を口の前に当てるとゆっくり首を振った。

「言葉を喋らずに相手の心を掴むには、

そつとうな表現力と演技力が必要となるわけですよ。

本当に良いものなら、老若男女子供まで十二分に楽しめるはずですよ。じゃないと、土日あんなに列を作りません」

「確かに、そつよね」

麻衣は、バイトの子にも相槌を打った。

彼の話では、1万円の最高クラスの席は共演者と接近できるプレミアムア席らしい。

土日のみ、それも1席しかないので、
まず、一般平民はチケットすらも見れないような貴重なものと言
った。

ネットで、倍の高値で売られていたこともあるとか。
話を聞いていた麻衣は、身を乗り出すように彼に質問した。

「でも、そんな席欲しがる人は、ミーハーなファンだけでしょう？」

「それが、そうでもないらしいですよ。一般チケットで観劇しても
十分に面白いから
リピーターは多いらしいんですけど、プレミア席は、実際に体感で
きる。

それが、感動を呼ぶ……と、テレビリポーターは言っていました」

「結局、テレビ局に乗せられているだけじゃない？」

本田は、やっぱり疑い深い口調だ。

「ええ、まあ。全ては、噂とテレビの話です」

「でも、1万円が1枚と8千円の子チケット3枚。
そのお客さん、こんなチケットを一体どこで手に入れたんでしょう
ね」

もうひとりのおばちゃん従業員が、
本田から手渡されたチケットを電気にかざして眺めながら言った。

「僕が思うに、ダフ屋とかじゃないですか？」

「そんな、プレミアものタダであげるなんて、あり得ないでしょう」

麻衣の突っ込みに、みんなが頭を縦に振り黙り込んでしまった。

『そのチケットくらいは自由に手に入る』

そんなことをサラリと言つてのける人つて一体何者だろうか。
今更ながら、凄い人に会つたのかもしれないそう思った。

「関係者つて事もありえますね」

バイトはまるで探偵みたいな口調である。

「下っ端じゃなく、きつと上の立場の人です。
監督？それとも劇場のオーナーとか」

劇場のオーナー

あの容姿に一番当てはまる立場だと、麻衣は思った。

第8話 「Monster」

ぞわぞわ……

広い空間に人々の話し声が響いている。

「歌手の『温州きよし』のコンサートでも
こない席に座ったことがないわよ。久し振りにドキドキする」

劇場大ホールの最前列に座った本田は、
さつきから麻衣の横でハンカチを出したり化粧直しをしたり
なんだか落ち着かない様子である。

この間もらったチケット4枚のうち

2枚は麻衣と本田で分けた。

隣同士の座席なのに、麻衣のチケットはプレミアム席。

本当は、弁当事件の時にお客の対応へと回った本田に渡したのだが、『目立つのは若い人の役目』なんて拒否され、仕方なく麻衣が座る事となった。

階段の隣の席、いかにも何かが起こりそうな席である。

「どうしたの？まだあの人探してるの」

「あ…、はい」

麻衣は、劇場に来た時から公園で出会った男性の姿ばかりを探していた。

入り口付近のダフ屋の集団には、男性の姿はなく。

若い女性がたむろする裏口から中に入ろうとしたら警備員に止められ女性達のひんしゆく視線を浴びてしまったし、

受付で、オーナを呼び出して欲しいと男性の容姿まで説明してみたが、

不審者でも扱つように軽く流されてしまった。

結局は、客席に座り満員の観客の中にあの姿を探したが、それらしき人はいなかった。

公園での出会いから、もう1カ月が経過している。既に、自分のことなど忘れているのかもしれない。自分だって、あの時に彼への未練を捨てたはず。

ちよつと、残念な気持ちとホツとしたような気持ちが混じった。

「ご来場のみなさま、今日は……劇場に足を運んでいただき……」

劇場のアナウンスが響くとともに、観客のざわめきが小さくなり
変わりに携帯電話を開ける音や電源を落とす音があちこちから聞こ
えてきた。

どうして持たないんだ。配達中、何が起こるか分からないだろう！

そう言えば、配達中に携帯を持っていなかったことを怒られたつけど、麻衣は彼の言葉を思い出していた。

確かに、携帯は必要かもしれない。

この間の事はともかく、いつ事故や何かしらのハプニングが起こる可能性は十分にあるから。

そんなことを思いながら、再びざわつき始めた階段の奥へと視線を向けた。

おじいさん？

視線の先には、ぼさぼさの白髪頭に長い口ひげを蓄えたまるで仙人のような容姿の老人がいて、危なっかしいほどによろよろしながら階段を下りているのが見えた。

きつと、脚が弱いのだ。

手すりも何もない階段はかなり不自由そうで、
あっちよろよろ、こっちよろよろ、
お客さんの席に突っ込みそうな勢いである。

妙に目立つネイビーのカンフーパーオに身を包み、
節でポコポコの杖とひょうたんの酒瓶をもつ老人は
紛れもなく劇団員のようで、周辺の客の笑いを取っていた。

その老人は、麻衣のところによるよろっと近づくと
杖で椅子をダンと叩いた。

「え？」

ダン、ダン……!

「はい？」

ダン！ダンダン！

「麻衣、そのひよろひよろじいさんは席のけって言ってるのよ」

「す、すみません！！気が付かなくて」

慌てて、老人に席を譲ると

まったくと言った仕草で軽く掌を上げる。

観客からクスクス笑われると、顔から火が出るような気持ちになった。

既に、「monster」は始まっていたのだ。

老人は、脚と腕を組みいつまでも麻衣の席に座ったままだ。おまけに鼾をかいて寝たふりをしている。

ちよ、ちよつと

老人に向けられているはずの観客の視線が
全ておろおろしながら立っている自分に向けられているようで、
逃げ出したくなった。

そんな姿が、また観客の笑いを取っていることに気が付くと
情けなさで涙が出そうになる。

「す、すみま……」

「ゴッ！」

豪快な鼾の音が切れると、老人は驚いたように飛び起きた。
そして、腰を上げようとすが立ち上がれず、
麻衣に杖を伸ばし助けを求めてきた。

それを見て、ようやくプレミア席での自分の出番が終わるのだと思
った。

妙に安心し、行動も早くなる。

差し出された杖をグッと掴むと引っ張り上げようとした。

だが。

なんて力なの！

老人の顔はひげや髪で覆われていて、目も半分だけしか見えないが、そんなに力を入れている感じではなかった。

片手で、それも指3本で軽く握っているはずなのに、両手で引っ張る麻衣の力にびくともしないのだ。

ただのひよろひよろじいさんではなかった。

「無理です」

麻衣は、頭を横に振ると苦笑して誤魔化す。

すると、おじいさんは指を2本に減らし、

まるで、挑戦状を叩き付けるかのように引っ張れとサインを出したのだ。

これをクリアーしない限りは、いつまでも観客の笑いもの。
劇に関しては、成功であろうが、麻衣的にはこれ以上目立ちたくな
かった。

プレミア席に座ったことを後悔し始める。

麻衣は、腰を少し落とし精一杯引っ張ることにした。
ちいさなちいさな掛け声をかけて。

「いさ」

「11の…ちゃん…!」

「えっ、うそ!?!」

身体がふわっと浮いたような気がした。

さっきまで、あんなに凄い手ごたえがあったのに
麻衣の掛け声に合わせるように力がゼロになったのだ。

倒れると思った瞬間、周りの景色がスローモーションのように見え、
視界が斜めになるのが分かった。

そして、観客の驚く声がホールに響くと、天井のライトがフッと消えた。

次にライトがついたとき、
いや、それがスポットライトだと気が付いた時には、
麻衣の身体は老人の腕1本で抱かれていた。

この人、おじいさんじゃない？

カンフーパーオは、仙人役の老人の本来のスタイルを
全て飲み込んでいたのだ。

背中に回されたその腕の感触は、
ひよろひよろじいさんのものではなかった。
筋肉質の腕から出される強い力は麻衣の体重にも微動だにせず。

背中が曲がりだっけすっけり伸びていて、
実際はかなりの長身であることに気付いた。
そして、髪の間から覗く鋭い瞳からは、

活き活きとした生命力が伝わってきたのだ。

仙人は、拍手の中麻衣をゆっくりと立たせると、
どこに隠し持っていたのか赤い薔薇の花をマジックのように
ポツと出し麻衣に手渡した。

老人らしくない細くて綺麗な指を持つ大きな掌

その彼の温かな手から、麻衣の掌にゆっくりと薔薇が渡された。

白髪の間から覗くガラス玉のような瞳からは、
さっきの鋭さはなくなっており。

視線が合うと、柔らかく細まってゆく

……まるで、いたずらっ子が笑うみたいに。

いつかどこかで、同じようなことがあったような気がする

…麻衣は、そう、思っていた。

第9話 「密着の基準」

おじいさんがおじいさんでなかったのは、ほんの一瞬であった。

全ては酒のせいだと言わんばかりに、ひょうたんの栓をポンと取り、ぐびぐびと飲むと再びよろよろと歩き出す。

ひょうたんの中身を観客へぶちまけそうになる度、客席から笑いとざわめきが起こった。

麻衣は、舞台へ上がる丸い小さい背中を見ながら、ぼんやりとたたずんでいる。

その麻衣の手を引く張り本田が声をかけた。

「ぼつと突っ立っていると、いつまでも笑いものよ」

「はっ、はい！」

我にかえった麻衣は、慌てて座った。

上がりまくったテンションを、

胸に手を当てることで落ち着かせようとする。

大きく深呼吸していくうちに、

心臓の高鳴りがまるで風の波の音のように遠のいていき、次第に周りの状況が分かってきた。

自分に向けられているクスクス笑う声、それと共に羨望の眼差しを一身に受けていることを。

「いいわね。私もあんなことされたい」

ささやき声が聞こえてくる。

聞き耳を立てるつもりではなかったが、自然と彼女らの話が耳に入ってきた。

「えっ？あんな髭面のじいさんに抱かれて何が嬉しいのよ」

「最後までみたら、きつと見る目が変わるわ。
でも、あの俳優さん、実物も凄くかっこいいらしいって噂よ」

「誰から聞いたの？」

「有名な話よ。追っかけでもしない限りは実物は見れないって」

「それちょっと貸して。」

パンフレットには……ああ、本当に名前だけね」

「名前は……」

「……」

そこまで声が聞こえたが、
音楽が始まり肝心な名前はかき消されてしまった。

いつのまにか、舞台からあの老人の姿はなくなっている。
劇場のライトはほとんど消え、

薄暗い中、劇の大道具準備が急ピッチで進められていた。
観客席の和やかなムードとは違い舞台の上は戦場であった。

「パンフレットか……」

「monster」の1200円のパンフレット。

写真集のような劇のパンフなんて

ミスターなファンが買い求めるものだと思っている。

麻衣には必要なかったが、

有名人であり実際に接したおじいさんの情報だけでも知りたかった。

「麻衣ちゃん、本当にかっこよかったの？」

あのひよろひよろじいさん」

本田も聞いていたらしい。

麻衣の服を引っ張りながら耳打ちしてくる。

「いえ、かっこいいかどうかは分かりませんが、
実際は若い人じゃないかと」

「そんなに密着したの？」

「密着というか……そこまではないですけど。触れ合った程度かな？」

「あれで、触れ合った程度なの？今の若い子は……」

本田の驚いた口調に、麻衣はしどろもどろになる。

「あ、じゃなくて基準が……よく」

1カ月前の

あの『恋人の”ふり”事件』が密着と言うのなら、

『今回のアレ』は触れ合い程度になるだろう。

身体からだの温もりを感じたか、感じなかったか……その基準でただ単純に判断しただけなのに。

密着と言われ、あのイケメン男性が麻衣の基準で出てきたのが、そもそも間違いであった。

「ほら、始まるわよ」

本田が麻衣の腕を突付く。舞台が次第に明るくなった。

第10話 「癒された心」

とある町の少林寺道場。

若い頃、究極の酔拳をあみ出したが、やりすぎで肝臓が悪くなり酒を断っている冴えない老師と、その昔、武術の奥義を極め書まで書いたが、女にだらしなかつたことで莫大な借金を抱え、以後女立ちをし、老師の道場で弟子たちに少林寺を教えている師匠。

そして、食べることに寝ることが大好きでぶくぶく太っている…弟子1。

真面目一本で武術も達人なのに、少林寺のアイテムを持たないとニューハーフになる…弟子2。

イケ面はよいが、しつこいほどのナルシスト、アイテムは鏡…弟子3。

道場のマドンナ的存在の女性…弟子4。

強い男が大好き、お色気おばちゃん…弟子5。

ちよっと、癖のあるキャラ達が揃った少林寺道場。それぞれのんびりとした生活を送っていた。

だがある日、道場破りの果たし状が届く。

相手は3人であるが、国内一の凄腕ぞろい。
全員が破れば、道場を破壊し看板を持ち去るというのだ。

期限は一週間だけ。

それまで真剣に練習などしていなかった弟子の姿を見て、
老師と師匠は彼らを一週間で強くすることを誓う。

しかし……。

弟子1は、太りすぎて身体が動かず。

ボロボロのアイテムしか持たない弟子2は、「怖い」と逃げまわ
り、

弟子3は曇った鏡のおかげで自分に自信が持てず

弟子4は、お茶くみしかしてなかったため武術が低下。

弟子5にいたっては、道場に強い男がいないためやる気減退
それが現状であった。

他流試合まで期限がせまる。

皆の悲惨さを見ながら考え込む老師。

だが、気が付くのだ。

弟子のウィークポイントを克服すれば、すべてが解決できることを。

太りすぎた弟子には、食べ物で気を引くことで、
今まで以上の力が発揮できることを知り。

ニューハーフには、木で作った短刀を持たせたことにより、
弟子の中で一番強い男…女？に変身した。

ナルシストが持つ曇った鏡は、
磨き上げることで見える自信を取り戻し、
マドンナは、その美貌と茶器を使うことにより武術に優れ

そして、強い男が増えた道場でも、
お色気おばちゃんの特訓に意欲を燃やすことが出来たのであった。

そして、老師は師匠に言った。
弟子達に全ての奥儀を伝えてくれと。

道場破りの日。

この町で、武術においては最強と言われるくらい上達した5人の弟子達であったが、結局は道場破りに勝つことが出来なかった。

弟子でひとりの道場破りしか倒すことができなかったのだ。期間が短すぎた。

師匠も健闘し、もうひとりを倒す。

だが、力尽きてしまった。

最後に残ったのは、老いぼれて足腰が不自由な冴えない老師だけ、相手は3人組のボス。

びびって逃げようとする老師に、

弟子達は夜な夜なしていた宴会の、残り酒が入っていたひょうたん

を投げた。

老師は、一瞬躊躇するが師匠と弟子に促され、
ひとくち……もうひとくち、飲んだ。

「monster」は、
カーテンコールを終え、閉幕した。

アナウンスが流れ、観客の割れんばかりの拍手が
名残惜しそうな拍手に変わると観客が一斉に席を立ち、出口へと急
ぐ。

「凄く楽しかった。2時間があつという間だったわ。ね！麻衣ちゃ
ん」

「麻衣ちゃん？」

「あつ、すみません」

圧倒した。

多分、その言葉が今の麻衣にはぴったり合てはまるだろう。
顎が痛くなるほど連続で笑ったかと思えば、
最後は息をつかせないほどのアクションの連続。

まるで、体操の選手と少林寺拳法を合わせた様な舞台をくまなく使つての飛んだり跳ねたりを俳優達は当たり前のようにこなしてゆくのだ。

すべての出演者の息はぴったりで、五輪の団体演技か、はたまた一種の芸術のようにも見えた。

その中でも目を引いたのはあの冴えない老師。

ひょうたん瓶、そして六尺棒をもらったあとの彼の変化に驚かされた。

役者の中でも、ずば抜けて武術の形かたが綺麗なのだ。

もちろん、素人目に見てであるが……。

助走をつけ、壁を伝い、麻衣の目の前で一回転なんてされた時には客席に突っ込んできそうぞうで、

思わず身を縮め、腕で我が身を守ったほどだ。

いつしか、冴えない面白いさんは、スゴかつこいいじいさんに昇格し、顔もほとんど分らないはずなのにその舞台俳優に尊敬か、はたまた恋心にも似た不思議な感覚を保持ってしまったのであった。

「でも、麻衣ちゃんもすぐく面白かったわよ。いじられ役でバイトしたら」

「もう、言わないで下さい！本田さん」

……そう。

最初で終わったと思われた麻衣の出番は、その後もあり、ニューハーフやナルシスト、男好きのおばちゃん弟子から散々いじられたのだ。

師匠から引つ張り上げられた時は、かなりブルーになったが、舞台上が上がってしまつと、その面白さから恥ずかしさも何もかもが吹っ飛び、
明るい気分に変化した。

両親がいなくなった時から、家や店の事情ばかりを考え、悶々とした日々を過ごしていた麻衣の心を
出演者みんなが癒してくれたような気がした。

「でも、本当に楽しかった。こんなに楽しいと思つたのは久しぶりです」

「来てよかったわね」

微笑む本田から、肩をたたかれる。

「はい」

麻衣は、ゆっくりと立ち上がった。

客席からホールに出ると、人だかりを見つけた。

長い列も出来ていて、何事かとホールスタッフに声をかけると、
「monster」の出演者との握手会だとの返事がかえって来た。

「麻衣ちゃん、握手してもらおう！」

「え！本田さん、私そこまでミーハーじゃ……は、恥ずかしい」

ほらほらと言われながら、背中を押される。

よく見ると視線の先の部屋、人だかりの奥には、
出演者がずらりと並んでいる。

その中には、あのおじいさんの姿もあった。

第11話 「老師の正体」

プレミア席でしっかり目立ったからだろう
麻衣は、ちょっととした有名人であった。

知らない人から次々に声をかけられ。
その度に苦笑しながら同じ返事を返してゆく。

それは、時間潰しになったようで、
長い列に並んでいても
あっという間に握手会の会場へとたどり着くことが出来た。

握手会の部屋は、控え室のひとつのようであった。

警備員とネームプレートを首からかけているスタッフの見張りが厳しく

物々しい雰囲気を作り出している。

妙に静かで居心地の悪さを感じるほどだ。

だが、握手会自体は和やかなムード。

男性でも躊躇せず、楽しそうに握手をしているのにはちょっと驚いた。

想像通り、出演者と握手を交わすたび麻衣はいじられた。

でも、さっきと違い一言声をかけてくれるのが嬉しい。

ニューハーフに、ナルシストに……そして、老人のもとへと進んだ。

相変わらず、老師は白髪と白髭で覆われており
素顔がどんな顔をしているか分からなかった。

「凄くて楽しかったです。頑張ってください」

もっと感動を訴える言葉を言いたかったのに、

小学生低学年レベルの文法に、ありふれた表現しか出来ない自分に

もどかしさを感じながら、右手を出す。
長身の老人を見上げると、
髪に重なる瞳が柔らかく微笑んでいるように見えた。

わあっ

劇が始まる頃より、彼を意識しているのが分かった。
老師の掌が近づくと、電流が走るように緊張で身体が痺れる。
大きな手がふわりと麻衣の手を包むと、
その温かい掌の温もりに生身の彼の姿を感じ、つかの間浸った。

握手だけで、このまま終わるのだと思った。

だが。

一瞬の沈黙の後、
老人の口髭が揺れた。

「来てくれて……、ありがとう。栗本麻衣さん」

刹那、時間が止まった……気がした。

低音のなんとも心地よい声が耳に響いたのだ。
知っている声だと直感が知らせる。
脳は、すぐさま声の主を突き止め、
ドキドキと麻衣の心臓をあおらせた。

自分の名前を知っている。
そのことを脳に加えると、この俳優が一体誰であるかなど
容易に理解できた。

「あ…あなたは……」

声などかける暇はなかった。
大きな手の温もりがなくなるとお別れの時を知らせる。
横から打ち寄せる波に流されるように、
隣にいる道場破りの役者の前へと移動させられてしまった。

気持ちは、あの男性ひとの場所に残ったままだ。
ひとりひとり握手をする人が変わるたび、
遠くなる老人の横顔を見つめていた。

第12話 「再会」

午後21時30分。

弁当屋の1日が終わる。

麻衣は、空っぽになったレジをポンと叩くと「お疲れ様」と呟いた。

「monster」を観た後から、麻衣の生活は一変した。

……と言っても、状況的には今まで通りだけど、

気持ちの上で充実している。

劇の面白さと凄さに感動したことも影響あると思うが、
やっぱり恋をしているから。

「あれ？バイトの子、忘れて帰ってる」

カウンターの棚に

「monster」のパンフレットが置きっぱなしだ。

もちろん、麻衣が買ったパンフレット。

あの男性の名前を知りたいがために、
握手会の後すぐ、シヨップに走ったのだ。
後に本田に事情を話すと驚いたというのは言うまでもない。
今日そのパンフを、オタクなバイトに貸す予定だったのだが、
置き忘れて帰っている。

「また、見ちゃおうかな」

「monster」のパンフレットをパラリと捲ると
すぐに老師の写真が出てきた。
何度も開きすぎて、その部分が形となって残っているのだ。

プロフィールの所、
六尺棒を持ち闘う場面は麻衣のお気に入りでもあった。

「青井 翔 23歳。」

趣味は、サーフィン・スノーボード・読書……。
やっぱり、写真がおじいさんじゃ説得力はないかな。
これだったら、趣味は、盆栽。嗜好品は昆布茶と羊羹ってところで
しよ」

「あれが…こうなるなんて、ありえないわよね」

悪戯半分で写真を指でパチンとはじくと、
頭上から声が聞こえた。

「ありえなくて、悪かったな」

「ひっ！」

突然の乱入に驚いた麻衣は、パンフレットを床に落とした。
慌てて拾おうとしたが大きな手が先にそれを拾った。

「へえ、パンフ買ったんだ」

パンフが麻衣の手に戻ってくる。

それは、紛れもなくチケットをくれたあの男性であった。大きな瞳にスツと伸びた鼻筋、引き締まった唇。そのスツピンの顔に白髪と白髭をイメージでくっ付ける。すると、『青井 翔』の写真と似たような風貌となった。

「買ったのなら、握手会で出したらよかったのに。他の人もサインもらってたでしょ」

「そ、そんな、ミーハーじゃないんだから、サインなんていらぬ。パンフは、ただの記念です」

麻衣は心の中で、馬鹿馬鹿を連呼していた。

会いたくて会いたくて仕方がなかったのに、本人を目の前にしたら、なぜか、気の無い素振りをしてしまったのだ。

パンフを買ったのだって、あなたの名前を知りたかったから……そう言えない天邪鬼あまのじやくな自分を恨んだ。

「それで、何か用ですか？」

もっと、話したいはずでしょうと

自分の口をぐいぐい引っ張りたくなる。

「ああ、弁当をね。でも、もう店終わったんだ」

自分が弁当屋だということを思い出す。

「あ…はい、すみません。」

うち、遅くまでやっていないんで。20時で終わりです」

「そうなんだ」

青井 翔は、残念そうな表情をしていた。

今日は、飲みに誘われても行く気分になれず、

自宅に帰る途中だったらしい。

弁当屋の電気がついていたから寄ってみたのだと聞いてもいないのに話した。

「どございようか？」

どうしようか？

なんて答えを求められても、返答に困ってしまふ。
この辺りでは、コンビニか、スーパーか、
駅近くの24h弁当チェーン店もある。

だが、彼はそんな答えを期待している風ではなかった。
左手首の腕時計を見ると何か考えているようで
宙に視線を向けそのまま目を閉じた。

「よし！食べに行こう」

「…………え？」

”行こう”のニュアンスがちよっと違う。

『さあ、一緒に行こう！』の行こうだ。

彼が、発音を間違ったのだと思った。
満足そうな表情の彼を麻衣は、じっと見つめた。

「何、キョトンとしてるの？一緒に行くって言うてるの。
まだ、夕飯食べてないんだろ？それとも、ここの弁当食べた？」

「いえ、まだ…」

夕ご飯は、いつも高校3年の妹が作ってくれている。
でも、この3日は大量に作ったカレーの消費が続いていて、
そろそろインドの国の人になりそうなほど。
夕飯は外食、好きな人とだなんてとてもおいしい話だけど、
ほんとに本当なのだろうか？

「本当に、私となの？」

「私以外に誰が居るの？
さっ、店閉めて。行こう麻衣ちゃん！」

青井翔は、「車で待ってるから」とだけ言い残したあと、麻衣の返事も聞かず出て行ってしまった。

「どっしりよう。『麻衣ちゃん』って呼ばれた」

名前で呼ばれ雲の上を歩いているような気持ちになった。

慌てて店の電気を消し、鍵をカチャリとかける。

店の外には、見るからに高そうな車が止まっでいて。

ドアに手を掛けようかどうしようか考えていると声をかけられた。

「運転してくれるのはありがたいけど。……指定席はこっち」

反対側のドアを開けた青井翔が、助手席を指差す。

外灯の明かりが、彼のいたずらっ子のような笑いを映していた。

第13話 「人生初デート」

「あ、もしもし？麻紀^{まき}？

うん…店は終わったんだけど、

ちよっと、ご飯を食べに行くことになって」

隣で運転する青井を上目遣いでチラツ、チラツと見ながら、麻衣は中学3年生の妹、麻紀に電話をしていた。
もちろん、彼の黒い携帯電話を借りてである。

「本田さん……じゃなくて、幸でもないの……え〜とね。
知り合いというか、友達というか…男！？男の人じゃ…」

誰と行くの？・男？という質問にしどろもどろになる。
弁当屋の人と行くと言ってしまえばいいのだろうか、

上手な嘘がつけないタイプであり。それは、青井にもばれていた。

「嘘つけないんだったら、」

正直に男と夕飯食べるって言えばいいでしょ？」

「ちよっ……!」

どうして、彼の声は普通でも大きいのだろう。

電話の向こうまで聞こえたようで、妹達の悲鳴が聞こえてきた。

『お姉ちゃんが男といる!!!』

『え~~~~っ、うそ! 人生初デートよ~~~~』

「と、と、とにかく! か、帰りはちよつと遅くなるから」

『遅く~~~~!?!?』

妹達の声が、携帯の小さなスピーカーから静かな車内に響き渡る。これ以上話すと、とんでもないことを言い始めそう。だから、話の途中でプチンと切ってしまった。

明日の朝のふたりの状態を想像すると、今から、気が滅入りそう。

だが、騒ぎを大きくした張本人はというと、どこ吹く風でハンドルを回していて。

『人生初デート』を聞かれていないか冷や冷やししながら、携帯電話をドリンクホルダーに置いた。

「電話ありがとうございました」

「楽しそうな家族だね。電話口に出たのは妹さん？」

「はい、中学の妹です」

「もうひとりは何？人生初デートだった？」

やはり、聞こえていた。

丸裸にされたような恥ずかしさを感じながら、高校生の妹だと答えた。

「なるほど、僕とのデートが人生初なんだ……」

青井は、いたずらっ子のような表情で、

麻衣をチラリと見る。

なにかしらの意味を含んだその余韻を消すため、
キツと見返した。

「かつ…、勝手にデートにししないで下さい。
そんなんじゃないです」

付き合ってもいないのに、デートカウントされたくはなかった。

本音は、『青井翔と栗本麻衣の初デート』でカウントして、
飛び上がって喜びたいほど。

だが、片思いな状況でそんなこと思えば、
ただの妄想でしかなく。

「人生初デートが居酒屋じゃ、雰囲気でないね。
ホテルにしようか」

「だから！デートじゃな……ええっ！！ホテル？」

「予約取ればいいんだけど」

「予約つて！」

青井は、麻衣の騒ぎにも知らん振りで、車のウインカーを上げ路肩に寄せる。携帯を取るとボタンを押し、耳に当てた。

「あ、青井ですが……。いえ、こちらこそ。

……女性とふたりでいつもの部屋で。

ええ、おまかせにしてもらって……。はい」

ホテルの部屋と言ったら。

頭の中で、いつか幸^{さいち}に貰った
レディースコミックの情景がパラパラと蘇る。

『いつか来る日のため、ちょっとは勉強すること！』
なんて言われても、過激すぎてドン引きで、
未だにダンスの奥深くに眠っている。

「へっ、部屋……。ちょ×××！！」

騒ぎ立てようとする麻衣の口を、青井の掌で塞がれた。
剥がうとしても「monster」の時のようにびくともしない。
その間もホテル側との話は進んでいった。

「じゃ、よろしく」

携帯がドリンクホルダーに戻されると同時に、
麻衣の口も解放される。
驚きで鼻呼吸をすることさえ忘れていたので、
息も荒く絶え絶えだ。

「君が考えているような事はないから、安心して。
今日は僕の誕生日だし、君は初デート……。
ただの食事でも美味しくなりそうな気がしない？」

「今日、誕生日なの？」

息を整えながら、新しく分かった青井翔の事実を驚いた。

「そう、本当の23歳。男と飲んでもつまらないし。家に帰っても、……ひとりじゃ面白くないからね」

そう言うと、青井は視線をフロントガラスへと移し、ちよつと憂いのある表情へと変わった。

これが、彼の俳優としての演技ならば相当な女たらしだと思つ。そんな表情をされて、

『はいさよなら、ひとりでどうぞ』

とは言えないだろう。

でも、なんとなくそれが演技とは思えずにいた。彼が弁当屋に来た時から薄々気付いてはいたが、この人は、最初から弁当なんて目当てにしていなかったのだ。

もしかすると、彼には恋人という存在はいないのかもしれない。だから、今日の誕生日に、誰かと過ごすことによつて、寂しさを紛らわせたかったのだろう。

男同士では、紛れない何か……それを麻衣に求めている。

そう、思った。

華やかな世界にいて、

女性だつていくらでも相手してくれそうなのにこの男性ひとがなぜ、この日に自分を選んだのか…なんだか期待してしまった。

「青井さん」

麻衣は、青井のことを呼んだ。

もう22時。

彼の誕生日が終わるまであと2時間もない。

今日だけは、初デートでカウントしてもいいかなと思った。

青井は、麻衣の方を振り向き何？と答えた。

その表情はいつもの人懐っこいものに戻っていた。

「そんなに言うなら初デートでカウントしますからね。
最高の2時間にしてやって下さい」

あくまでも、冗談ばく聞こえるように声のトーンを上げ、麻衣はニツコリと笑って見せた。

「ああ、分かってる。最高のデートにしてやる」

青井に頭をポンツと叩かれるとくしゃくしゃと撫でられる。

これまでに見た事が無い、彼の優しい微笑みを見た。

第14話 「はじめてのKISS」1

「こちらは、仔羊のハーブ仕立て 赤ワインソース
レモンペッパー風味のタリアテッレ添えで、ございます」

真っ白いお皿に、
彩りよく盛り付けされたフランス料理のメイン。
食べ方が分からないので、
目の前にいる青井の仕草を真似しながら、ひとくち口に運んだ。

「わああ、仔羊なんて初めて食べたけど、
すごくおいしいです！
このタリアテッレ…？？あ…パスタも」

「タリアテッレでございます。
お褒め頂いてありがとうございます」

「前菜も可愛くて、スープもパンも全部美味しい。
なんだか凄く幸せな気分です。」

「……あ、すみません。パンのお代わりをもらえますか
……その、何度でもおかわりしていいんですよ……」

「もちろん、よろしいですよ。」

焼き立てをお持ちいたしますので、少々お待ちください」

「はい！」

焼きたてパンとメインを一緒に食べたくて、

麻衣はフォークとナイフを置いた。

そして、メイン料理が来てちよっぴり口数が少なくなった
青井をチラッと見る。

彼は、麻衣と視線が合うと笑いを堪え咳払いをした。

「美味しいなら、遠慮しないでどんどん食べて。」

他の料理が食べたいなら、もう一品頼んでもいいけど」

「いえ、そこまでは…。あの…私、そんなにおかしいですか？」
「どうして？」

前菜から、彼は麻衣の言動にいちいち笑っていた。目が合うのも恥ずかしく見て見ぬ振りしていたが、どうしても気になってしょうがない。

「だって、さつきからよく笑ってるから」

「いや、いいなあと思って。
それだけ感動してもらったらシェフも喜ぶよ」

「本当にそれだけ？」

「それだけ」

「本当に？」

「ほら、ワインがちょっとしか減ってないけど。
美味しくない？」

「いえ、すごく美味しいです！」

「でしょ。ここのソムリエが選ぶワインは、僕の好みばかりなんだ」

結局は、誤魔化されてしまった。

麻衣でも名前くらいは聞いたことのある帝王ホテル。そのスイートルームにいた。

入って、その部屋の広さと数、調度品の凄さに驚き、まるで、新築祝いに来た人みたいにあちこちとクローゼットの中まで見回った。カーテンを開けようとすると、青井から止められ、初めて電動式だと言うことに気が付く。

ゆっくりと開いた窓の向こうには、まるで宝石箱をひっくり返したような夜景が広がっていて、感動のあまり何にも言葉が出ず、じっとその夜景に見とれてしまうほどであった。

ディナーは、その180度夜景が見える部屋に用意された。すべてが、今までのフランス料理の概念を覆すくらいのもの。

見た目にも口にも美味しいものばかり。

麻衣は、言われるがまま赤ワインをコクリと飲んだ。

ミネラルウォーターの青井を差し置いて、

お酒など飲めるはずも無く、麻衣はアルコールを拒否したのだが、

「このワインは凄く美味しいから。

酔った娘を襲うなんてしないよ」と笑われ、頼んでもらった。

控えていたつもりだが、既に半分以上は飲んでいるようで、頭の奥がふわふわと浮かんでいるような感覚になっていた。

「赤ワインなんて、渋いものばかりだと思ってました。でも、これは、フルーティで、でもコクがある」

ワイングラスをテーブルで揺らすと香りを楽しむ。

全ては、幸から教わったことを真似しているだけだが、

『cocktail glass』の店と違う雰囲気。

なんだか気持ち『大人の出来る女』っぽくなったような気がした。

「君、20歳だって言ったよね。

結構飲める口みたいだな」

「友達からは、飲むと一緒にいたくない
と言われるんですよ」

また話題が弾み始めたのがうれしくて、ワインが進む。

「どうして？」

「恥ずかしい話、愚痴っぽくなって、
拳句の果てには寝ちゃうらしいです」

あまり、飲ませないようにと釘を刺したつもりであったが、
青井は、驚くこともなく

「眠たくなったら、寝たらいい。泊まっていけば？」
と軽く返答した。

「泊まるって！」

いろんな想像が一瞬にして脳裏を過ぎり、
顔が熱くなってくる。

青井にも当然ながら伝わっているようで、
ミネラルウォーターが入ったグラスを指で示し目を細めた。

「君が泊まるなら、僕もワインをもらおうよ。」

……僕との初体験、悪くないと思うけど」

ストレートな言い方に驚き、ビクリ身体が動く、
グラスに指が当たりカチャンとグラスが揺れると、
あわててグラスを押さえた。

「な、何言っているんですか？じよ、冗談はよしてください」

冗談なんていってないけど…と言いながら、
青井はクスクス笑っている。
その間にドアをノックする音が響き
焼きたてパンが入ったかごを持ったホテルマンが入ってきた。

よ、よかった

パンを取り分けてくれるホテルマンに
思いがいつぱい入ったありがとを伝える。
ひとまずその話題を終わらせることが出来たことに
麻衣は胸を撫で下ろした。

「そうだな、僕の自己紹介は終わったから、次は麻衣ちゃん話して」

「えっ、私？」

ここまで、青井はいろんなことを話してくれた。

両親と兄の4人家族

大学時代は、学業傍らモデルの仕事をしていたこと。

まわりの友人から

知らぬ間に『monster』のオーディションに応募され、無理矢理行かされたのに、受かってしまった。

あれだけ動けるのは、小さい頃から行かされていた

コテンドーと体操教室のお陰だと話した。

話の中でも一番面白かったのは、出演者の裏話。

あと、麻衣を含めたプレミア席のお客さんの反応話だろうか。

「私の話ですか？」

麻衣は戸惑ってしまった。

あまり自分の話はしたくなかったのだ。

両親の話なんて、しょうものなら、

あの日のことを思い出して涙が出そうになる。

だったらその話題は避けて、姉妹の話をしようと思った。

努めて明るく、妹達の話をした。

話に困ると従業員の話。

それが終わると幸のこと。

それが終わると…。

「それで、君はどうして弁当屋を開きたいと思ったの？」

言葉に詰まると、すかさず青井からの質問がきた。

「見た感じ、新しく始めた店には見えないし、失礼だけど、君は経営者向きじゃないしね」と、青井は付け加える。

やはり、どう見ても弁当屋店長なんて無理があるようにしかみえないらしい。それは自分でも分かっていた。

「
」
「
」

色々と、想いをめぐらしながらテーブルに置いてあるキャンドルの炎をボンヤリと見つめた。

「私は、つい、こないだまで大学生やっていたの」

とうとう、言ってしまった。

麻衣の表情の曇りに気付いたようで、青井は食べるのをやめ視線を向ける。その熱い視線が苦しくて、いてもたってもいられなくなった麻衣はナフキンで口元を拭き席から立ち上がった。

「なあんにも、考えていなかったのよ。就職だって、どこかの事務でもして。そのうち、素敵な王子様のような男性が現れ結婚できたらいいなって感じ」

「王子さま……」

青井の声がやまびこのように聞こえるなか、ふわふわ無重力のような感じで歩き、広い窓の中央に立ち夜景を眺めた。

「まさか、自分の親が事故で死ん…じゃうなんて…普通想像しないじゃない？」

死という言葉で、
いろんな記憶が引き出されていった。

第15話 「はじめてのKISS」2

「まさか、自分の親が事故で死ん…じゃうなんて
…普通想像しないじゃない？」

死という、言葉でいろんな記憶が引き出された。

警察からの電話。
事故と聞かされた動揺から、
受話器が手から滑り落ち、呆然とした。

時計の針をゆっくり回しているかのように
全てがゆっくりと動いているように感じた。

おろおろしながら、学校に連絡し
騒ぐ妹達を連れて病院へと急ぎ、
案内されたのは
普通の病棟じゃなく霊安室。

その冷た過ぎるベッドに横たわっていたのは、
紛れもない両親の姿で……。

色さえも無い
あの時の光景が次第に薄れていき、
現実の夜景へと変わってゆく。

街に重なった宝石の光がぼやけて滲むと
麻衣は、我にかえた。

「……だから、大学を辞め
両親がしていた弁当屋を継いだの」

「これで……自己紹介は終わり」

それだけしか言えなかった。
声が震え、涙がほろりと頬を伝わると、
握った手に力を入れ深呼吸をする。
きちんとした言葉が出るようになるまで、
夜景を見ながら現実逃避した。

「夜景が綺麗…」

滲んだ夜景がクリアーになると、
麻衣の心も落ち着いてきた。
リハビリのように少しずつ言葉を出してみる。

「あれは、国道で、あれが観覧車かな？」

全ての夜景は、機械的なものから出されているはずなのに瞬いてみたり、少しずつ移動したりまるで生きているようだった。もちろん、あの光の下ではいろんな人々が今を生きていて。

その夜景、ひとつひとつに生活がある事に感動すると、ふと自分の店を探してみたくなった。

「うちの弁当屋どこかな」

独り言のように問いかけると、

右手で夜景を指しながら、180度の夜景を追ってゆく。ちょうど中央に達した時、その手は大きな掌によって包まれた。

あつ

驚きを声に出せないまま、胸のドキドキが増した。

麻衣の指はゆっくりとあるポイントに移動させられ、耳元に青井の低音が優しく響いた。

「あの暗い一角が、君と出会った公園。

その隣、ライトアップされているところが

『monster』をやっている劇場だ。
だから、弁当屋はここ」

まわりより光が少ないビジネス街に焦点を合わせると、
青井の掌がスツと離れた。

ホツとしたのもつかの間、
視界の隅に彼の影がふと現れて、
髪をとめていたバレッタの音がパチンと鳴った。

「な、何を…？」

麻衣の黒いストレートの髪が
さらりと音を立て落ちると同時に
彼の腕が胸の前でクロスされ、
背中から包み込まれるように抱き締められた。

「あっ…」

彼の胸の鼓動が聞こえそうになるくらい
背中に彼を感じていた。
麻衣の耳にあたる彼の頬の温かみが、

これが夢ではないことを表していた。

窓に映る自分達の姿に気が付くと、卒倒してしまいそうになって。それは、まるでドラマのワンシーンのようであった。

「青井さん……十分に初デートの雰囲気分かりましたから。もう、演技はいいです……」

「離れないで」

動かそうとする身体からだを
青井からグッと止められる。

「もう少しだけ……こうしていたい」

その言葉に、心の切なさが自分自身を覆い尽くしてゆく。

限界に近かったのだ。

これ以上続けられたら、『彼は私のことが好き』と

錯覚してしまいそうであった。

だが。

「少しだけど、気持ちが分かるかもしれない」

「え？」

「両親のこと…辛かったね」

同情？

彼が優しくしてくれるのは、
両親を失くし、悲観する自分へのなぐさめ。
彼なりに一生懸命気持ちを考えてくれたのだろう。

「辛いけど、仕方ないです。
亡くした両親を思えばかりいても、前には進めませんから」

それが、麻衣の今の気持ちであった。
何が何でも前に進まない、一家は路頭に迷うのだ。
そんな前向きな言葉に
青井は相槌を打ってくれるものだと思っていた。

しかし、違った。

「麻衣ちゃんは強いんだな。
僕は……いつまでたっても前に進めない」

「えっ？」

耳元から聞こえてきた青井の言葉に驚いていた。
彼の顔を見ようと身体からだを擦る。
そんな麻衣を、青井はさらに強く抱きしめてきた。

「今、なんて……」

後ろにいる彼の表情が分からなくて、
窓に映る青井を見つめることしか出来ない。

彼もまた大切な誰かを亡くしたんじゃないかと、
気が気ではなかった。

両親でもなく、兄弟でもない
話に出てこなかった誰か。

「あなたは」

麻衣の脳裏に過ぎった言葉が、思わず口に出る。

「誰を亡くしたの。まさか、恋人？青井さ…！」

青井の名前を呼ぼうとすると、
身体からだを強引にひっくり返された。

反動でよろめく麻衣の腕をグッと掴まれ引き寄せられる。
彼の顔が見えたかと思っただ瞬間。

唇を奪われた。

息が出来なくて苦しかった。

離れようと彼の胸を掌で押すたび、彼の腕に力が入った。

彼の瞳は少し潤んでいて、

麻衣の瞳をじっと見つめ続けている。

切なさで溢れるその目をみると、
また、涙が止まらなくなつて……。

彼に全ての力をゆだねた。

第16話 「逆告白」

彼とのキスは、永遠に続くかのように思われた。

唇の温かさが無くなると急に寂しくなり、
ゆっくりと目を開ける。

青井の指が麻衣の涙の痕あとを拭くと
頬に軽くキスをされた。

「初めてのKISSは、僕がもらったから」

彼から、ポンポンと頭を叩かれ、
くしゃくしゃと髪をなでられる。

最後にギュッと抱きしめられるとゆっくりと解放された。

「青井さん……」

彼の名前を呼んだ。

「翔でいいよ。言いくいだろう」

「翔……」

男性の名前を呼び捨てにする事が、
こんなにもエネルギーがいる事だなんて、初めて知る。
なんだか恋人気分で心が躍おどった。

「ん、何？」

すると、翔は麻衣の肩にそっと手を当てて耳を傾けてきた。さり気なく自分の身長に合わせてくれているのだと思うと大切にされている気がして、胸の奥がきゅんと苦しくなった。

「何でも聞いて」

彼の言葉と同時に麻衣の背中に手が当てられ、元いたテーブルへと誘導されてゆく。

「えっと」

ただ、名前を呼んでみただけだが翔は何か尋ねられたと思っっているのである。麻衣は、テーブルに着くまでに彼への質問を探すことにした。

「…ちっきの、事」

席に着くと、あの意味を翔に訊ねてみた。
もちろん『いつまでたっても前に進めない』の
言葉の意味だ。
キスで邪魔され真意は謎のままだから。

「その、前に進めないって、どういう意味だったの？
もしかして、あなたも私と同じような……」

彼は、無言のままワインクーラーからワインを取り出すと
麻衣のグラスに注いだ。
手馴れた感じでクーラーへと戻すと、麻衣をじっと見つめる。

「君の唇を奪うため……だと言ったら怒るかな？」

「えっ？」

ドキツとした。

クツと笑った翔の瞳が棘のある視線に変わったからだ。
初めて見た彼の表情がなんだか怖い。

麻衣は言葉につまった。

「深い意味はないよ。ただ、君の頑張りに感心しただけ」

「そうですか」

それは、返答になどなっではいなかった。

彼には似合わない歯切れの悪い返事に、

このまま話題を掘り下げてもプラスなことはないと感じる。

これ以上、この話題には触れてはいけないと直感が教えてくれた。

「ああ、パンもお肉も冷え切ってしまったてますよ。

早く食べてデザートにいきましょう」

無理矢理料理の話題へと戻し、何もなかったのように振舞う。

翔に向かって笑うと、

意識しすぎてなんか機械的できこちなくなつて。

そんな表情を隠すため麻衣は、ワインを一気にのんだ。

「今日は、ひっ、ありがとございました!」

助手席から降りると、千鳥足で車から離れた。
側溝の蓋にヒールがはまってこけようとする時、
腕を引き上げ翔が助けてくれた。

「すみませんね。ひっ、誕生日のお祝い遅くなって、ひっ」
しゃっくりが止まらず、
まるで、よっぱらいの親父のようだ。

結局、食事が長引き、
ホテル側が用意してくれたバースディケーキに火を灯した時は、
翔の誕生日を過ぎた時間であり。

午前0時を過ぎてハッピーバースディを歌い、
23歳の喜びを一緒に分かち合った。
本当の恋人だったらいいのと思いつながら、
幸せなひと時を楽しんだ。

「プレゼントだって、ひっ、ないし。最悪ですよ、ホント」

心配そうな翔の表情が見える。
背中をさすってくれるのは、
しゃっくりを止めたい気持ちからだろう。

「十分もらったじゃないか。楽しませてくれたし、あと、KISS
も」

「やだあゝひつ。信じてくださいね。
私、ひつ、簡単にキスできる、ひつ、
人じゃないんですから、ひつ」

テンションが上がリつ放しであることなど
分かってはいるが抑えきれない。
そんな麻衣に分かつてる分かつてると言いながら、
翔は、困惑気味の表情で、
背中をポンポン叩いていた。

「絶対、ひつ、信じてない、ひつ。
好きな人だから、ひつ、許したんですから」

意思とは無関係に、ペラペラ本音を話す。
止めたいと思っても口は別物、制御不能で。

「だって、通りすがりの…ひっ、
恋人のフリだと言われても、ひいっく、
私はあなたに、ひっ、恋をしてしまって、ひっ
」

酒の勢いとはいえ、こんなんじゃない逆告白である。

もちろん人生初なので、言っただけなから後悔の念に襲われる。
絶対、ふられると覚悟した。

「自分でも、ひっく、馬鹿だって思ってますよ。ひっ、」

「馬鹿じゃないさ。
いつ恋に堕ちるかなんて、予測不可能だから」

ありがとう……。

翔にそう言われて、顎に手を掛けられると
クイツと引き上げられる。

キスの予感から目を閉じると、彼の唇がそつと触れた。

このキスが、彼の答えだと思いたかった。

翔が自分の告白を受け入れてくれたんだと……
思いたかった。

第17話 「テレビ越しの彼」

「店長、お先しました。休憩入ってください」

「はあい」

スタッフ控え室に入ると、いつものようにお茶の準備をする。テレビの電源をONにするとテーブルに座った。

一般より遅い3時のおやつは夕方、ニュースの時間だ。あまり興味はないが、孤独を紛らすのはテレビしかない。

「いただきます」

常時、切れた事が無いちゃぶ台の上のチョコレートを1個取ると、甘い香りが広がり、疲れが消えてゆく。口の中に放り込もうとすると、ドアを叩く音がして、オタクなバイトが顔を覗かせた。

「店長! 『monster』のパンフレットありがとうございます。」

返しておきますね」

「あつ、それと」

バイトは、パンフを麻衣の手に返すとテレビのリモコンをサツと取り、勝手にチャンネルを変え始めた。

「今日、テレビに出るらしいです」と言いながら。

「誰?」

「ほら、あいつですよ。チケットをくれた青井翔。」

今日は『monster』の公演が始まって1年が経つみたいで特集があるんです。

『出演者の素顔を徹底公開』って新聞に書いてありましたよ」

「へえ、そつなの」

気の無い返事をしながらも、

心の中ではドキドキが止まらなかった。
バイトがいなくなると、麻衣は自分の唇にそっと手を触れる。

何日経っても、彼の唇の感触は忘れられない。

初めてのKISSを、

突然あんな形で迎えてしまうなんて思ってもみなかったが、
まるでドラマのようなシチュエーションに
今も酔いしれる。

ちよつと強引ではあったが
夢のようなひとときで。

「…特集は、今人気急上昇中のノンバーバルパフォーマンス劇
『monster』の魅力をつぶりお届けいたします」

ぼんやりしているど、

テレビから『monster』と言う言葉が聞こえてきて。
慌てて視線を向けると、

この間肉眼で見た劇のダイジェストが流れ始めた。

10人いる出演者の中でも、麻衣の瞳につくのは老師であった。未だに、翔と老師が同一人物だとは思えず不思議な感覚になる。

ダイジェストが終わると

アナウンサーによるバックステージツアーがはじまった。

大道具のからくりを紹介し、開演中の劇を袖から見学したり、閉演後のステージで、格闘の場面を実際に体験したりしている。

アナウンサーは、かなり興奮しているようです。

そんな彼のテンションに、

体験者のひとりでもある麻衣も共感でき、

チヨコのこと忘れて見入っていた。

「それでは、本日のゲストをご紹介します。」

『monster』にて、老師役を演じている青井翔さん。
そして、ニューハーフ役の柳谷飛鳥さん、
そして、マドンナ役の池崎美優さんです。
どうぞー！」

翔の名前を呼ばれると、

麻衣は、子供のようにちゃぶ台から離れ
テレビの真ん前に座りなおした。

なぜだか正座になっていて、

心臓は弾け飛んでしまいそうにバクバクいつている。

スタジオ内には、すでに『monster』の衣装に
身を包んだ3人が現れていて、
格闘シーンを再現した。

今日は、白いパオに身をつつんだ翔。
形を決めるたびにシルクの生地が揺れ、
金糸で施された龍がまるで本物の龍のように立ち上る。

白、赤、青の3人のカラーが正確なリズムで交わるたび、コントラストの綺麗さのため息が漏れた。高いお金を払ってもいい、またあの感動をじかに感じたいと、麻衣は思っていた。

演技は、クライマックスに達したようだ。内容は濃いのが、あまりにも短い時間のため、欲求は満たされずにいる。

もどかしさにイライラしながらも、1秒たりとも見逃せず、さらにじわじわとテレビにくっついた。

マドンナから老師へと六尺棒が投げ渡された。

老師は、見事にキャッチするとそれをくると回し反対の手で白髪のをグッと掴む。

「えっ？」

あの時とは、違う展開。

六尺棒をキヤツチしたら、それを使った激しい動きが始まる。自分の身体の一部に触れるなんて、あり得ないはずであった。

翔、何するの？

そう思った瞬間。

まるで雪の帽子のように

顔全体を覆っていた白髪と髭が宙に舞った。

本物の青井翔。

麻衣の胸がきゅっと潰されるように痛くなった。

翔が動くたびに、大きな瞳を隠す茶色い前髪がさらりと揺れた。スツと伸びた鼻筋のラインは綺麗なシルエクトを描き、そして、今でも忘れられない引き締まった唇は真一文字に結ばれていて、動きのハードさはこめかみから流れる汗として現れていた。

全身を使ったアクション。

3人の動きがより激しく、麻衣の心を揺さぶってゆく。

そして。

六尺棒をダンと床に打ち付け形を決める。

スタジオ内に、ラストの音の余韻が流れた。

5分間の演技はあっという間に終わった。

「CM後は、トークを交えながら、ゲストの皆さんの素顔に迫りたいと思います。それでは、CMをどうぞ！」

女性ニュースキャスターの声が入ってきた。
その声に我にかえると開けっ放しの口を慌てて閉め、
そそくさとちゃぶ台に戻る。

テレビ越しの彼。

この間の翔との時間は、夢か妄想であったかのように感じる。
なんだか遠い存在のように思えた。

第18話 「ひとすじの不安」

「髭をつけている方が、落ち着きますね」

テレビの中の翔は、
寂しくなった顎に触れ、照れくさそうに笑った。

ニュースキャスターによると、
「monster」の中でもひとり正体を現さない新人俳優の彼は
雑誌やワイドショーに幾度となく取り上げられ、
かなりの注目度だという。

本日、素顔を披露したのは
来春から始まるドラマの撮影に入るため。
今後テレビにも積極的に出てくる事になるだろうと話した。

「悲恋ではありませんが、
恋愛ドラマなので内心楽しみにしています。

飛鳥や美優は俳優に関して先輩ですから、色々と教えてもらわなければいけません」

正真正銘の翔。

優しいな低音ボイスは、心地よく鼓膜に響いていく。

「恋愛に関しては、翔が先輩だけど」

「おい、よせよ」

飛鳥の突っ込みに、屈託の無い表情で翔が笑った。

一気にスタジオの雰囲気は和らぎ、テレビの向こう側なのに、なんだか自分もその仲間のひとりになっているような感覚になる。

「興味深いお話ですね……。
いちファンとして、お聞きいたしますが、
舞台の合間も出演者の皆さんで恋愛話をされるのですか？」

女性ニュースキャスターは、本音で聞いているのか化粧をしてない耳朶と首筋までもが紅潮している。だが、その質問は麻衣自身とても興味深いものであり、でかしたと心のうちで叫んだ。

「僕らの仕事は気を許せば危険を伴うものですので、舞台中は、みなピリピリしています。けれど、それが終われば食事に行ったり、恋愛話も結構してますね」

恋愛話ですって

自分の話も彼らに話したのかもしれないと思うと急にドキドキする。話したのであれば、「monster」公認の仲となるわけで。

「好みの女性は、どんなタイプの方ですか？」

テレビが完全に私物化されているようだが、キャスターはいいところを突いてくる。翔はなんと表現するのか気になった。

彼とキスをした身分

麻衣のことをタイプだと言ってもおかしくは無いはずであった。

『ドジで、天然、酔っ払ったらくどい女性』

だがそれは、翔のキャラには合わない言葉というのは重々分かっていた。

「そうですね。頭のよいキャリアウーマンの女性かな。

森川キャスターも、実際こうやって話をさせていただと

また違った女性らしい一面が垣間見えて、ドキドキさせられます」

「えっ？」

青ざめていく麻衣の表情とは正反対に、

日頃討論番組などで、お堅い政治家や評論家と対等に話している
キャスターの顔はほころんでいった。

素に戻りそうになった自分に動揺を隠せないようで、
ちよつと失礼させて喉を潤させていただきますと言いながら、
麦茶のグラスに口をつけた。

「この人、青井翔って言ったっけ？」

「きゃっ」

突然、背後から声がして、麻衣は肩を上げて驚いた。
視線を向けると、本田がマイカップにお茶を注ぎながら、
テレビを見ている。

マグカップに並々とお茶が入ると麻衣の隣に座り、
チヨコを2個頬張った。

「俳優とはいえ、新人でしょ？」

生放送でこんな歯の浮いた台詞をサラッとと言える男なんて、
さうとう女慣れしているか、さうとうな演技派かのどちらかに違
ないわね。

女をその気にさせるテクニクを肌でマスターしている感じ」

「は、はあ」

「麻衣ちゃんは免疫がないんだから、
こんな危なっかしい男に近寄っちゃ駄目よ。
言いくるめられて遊ばれるのがオチだからね」

本田は、自分たちのことなど知らないはず。
ただ、話の流れで言っているのだから、
見透かしているような言葉にただただ苦笑するしかなく。

「大丈夫ですよ。あんなカッコいい男性が私など相手しません」

と、しか言えなかった。

まさか、キスしたなんて口が裂けても言えない。

「それも、そうね」

知らないとはいえ、本田の最後のひと言は
きつく麻衣の心に刺さった。

本田の言つとおり、本当に遊ばれたのだろうか。
……なんだか不安になっていた。

第19話 「嵐の予感」

弁当屋の忘年会を近所の居酒屋で済ませた後
ひとりになった麻衣は、
幸が勤める『cocktail glass』でひとり二次会をし
ていた。

「こんな時間にひとりなんて、寂しい女ね。
適当に男を見繕って呼んであげようか？」

「いい遠慮しておく。どうせ、お客さんでしょうっ？」

昔から幸は、男の人と仲良くなるのが得意だ。
でもそこから恋人に発展しないのが悩みだという。
さっぱりしている性格が災いしてか、

気兼ねなく付き合いやすいというのが男性側の理由らしい。

呆れ顔の幸は、おつまみの皿を取り替えながら言った。

「いいじゃないの。見ず知らずのお客だつて
意気投合すれば普通に恋人になれるじゃない」

「よしておく。何喋っていいか分からないし」

「最初は誰だつてそうじゃないの？
そう言えばその後、あの男とは会った？」

「あの男？」

「ほら、青井翔つていう俳優：パンフレット見せてくれたでしょ。
こないだ食事してキスしたつていう」

「しいーっ、内緒だつて言ったでしょ」

普通の声量でとんでもないことを言い始めた幸に慌てた麻衣は
カウンターの椅子から立ち上がった。

きよろきよろと挙動不審な態度を繰り返すと
幸に促されて椅子に座る。

暖房は適温なはずなのに、変な汗が出てきた。

「忙しい職業だとはいえ、連絡ひとつよこさない男でしょ。遊ばれたんじゃないの？」

女をその気にさせるテクニックを肌でマスターしている感じ。
……言いくるめられて遊ばれるのがオチだからね。

幸の言葉と、本田の言葉が重なった。

実は、あのホテルでのキスから、もう1ヶ月以上過ぎているが、青井翔はチラツとも姿を見せないし、連絡もないのだ。

まあ、携帯がなく、固定電話の番号も教えていないから、かかってくるはずは無いとは分かっている。
でも、この間のように突然顔を見せてくれることを期待していたのも事実であった。

「連絡無いなんて、当たり前よ。
電話番号だって交換してないし……」

「変な関係。キスしたっていつても、それじゃ、友達未満じゃない。
普通交換するでしょ」

自分の心の隅に追いやっていた不安を、
幸が代弁した気がした。

「友達未満」

麻衣は呟いた。

確かにそうだ。

お互い印象がよければ、互いの連絡先を教え合い、
それからデートを重ね、恋人関係も深まってゆくのが

普通であるうが、麻衣の場合は全く違う。

連絡先を教える以前に、抱かれ、初デート

そして、初キスまで捧げてしまったというもの。

自身に恋心があるとはいえ、

想い馳せていた恋人関係とはまったく違うものであり。

悲しくなる一方であった。

心に隙間風が吹く。

頻繁に現れるようになった彼をテレビ向こうに見ながら、ひとり勝手に想いを馳せている事が急に空しくなった。

「じゃ、諦めるのが正解かな」

「さあ、それは、麻衣の自由。

男を忘れるなら男、その気になったら

いつでも見繕ってあげるから」

「はは、それは遠慮しとく」

麻衣は、苦笑しながら幸にカクテルのお代わりを頼んだ。

今日はスローペースねと言いながら、

幸はグラスを引き上げる。

シェーカーに入れるための果実酒を準備すると
氷を砕き始めた。

「仕方ないわね。じゃ、気晴らしに
パークと遊びに行こう。いつが空いてる？」

「ちょっと待って」

話しながらでも、手の動きが止まらないことに感心しながら
脇に置いていたバッグからスケジュールを探す。
だが、大きなスケジュール帳の隣に
まだ傷ひとつ無い
シャンパン色の携帯電話を見つけた麻衣は幸を呼んだ。

「そろそろ！幸。私ね、昨日……」

「携帯を……」

買ったのよというはずであった。

だが、その声は、ドアベルと幸の『いらっしやいませ』との声にかき消されてしまう。
仕方なく、「まっ、いっか」と咳くと
幸がテーブルをコンコンと叩いた。

「何？幸」

幸は、風邪で声を失った人みたいに
パクパク口を動かし、表情だけで何かを訴えている。
だが、キョトンと首を傾げる麻衣に痺れを切らしたように、
おしぼりを2本準備し始めた。

そして、カウンターから出てくると
麻衣の耳元に囁いたのだった。

「あれって、青井翔じゃない。女連れよ」

「えっ！」

聞き違い。

あるいは幸の勘違いだと思った。

不信気な視線で、幸の進む方向にそつと視線をやる。

「お客さま、コートをお預かりいたしますしゅつか」

「そっだな。預かってもらおう」

紛れもなく青井翔であった。

隣にいるのは女性。

名前までは分からないが、夏ごろに放映されていたドラマといくつかのCMにでている清純派で売りの美人女優だ。

翔は、慣れた感じで女性のコートを脱がせると幸に渡す。自分も黒のロングコートを脱ぎ渡した。

「なかなかいい雰囲気でしょう」

「そうだね。英国風な感じがいい」

翔が、ゆっくりと店内を見渡した。

視線が合いそうになって

麻衣は慌ててカウンターのテーブルに視線を戻す。

まるで、嵐の森の中のように
麻衣の胸がざわざわと騒いでいた。

第20話 「夜嵐」

「ああ、聞こえない」

まるで、探偵のようだ。

視界の隅の隅には、常時翔の姿を入れていて、

耳は、ソファー席に並んで座るふたりの言葉に集中する。

だが、夜半のバーは全て席が埋まっているため、

あちこちの声が一斉に耳に入り込んでくる。

肝心な人の声は、聞こえてはこなかった。

突然、女優の色っぽい笑い声が聞こえた。

な、何事！

心臓は緊張しっぱなしで張り裂けんばかりになのに
その声に、また大きく鼓動を打ち始め。

苦しさに耐えながらも、麻衣は間接照明の薄暗い中
目を凝らし、視界3分の1までふたりを入れた。

「う、うそ！」

その光景は、麻衣には耐え難いものだった。

女優は翔の肩にもたれかかり、
彼はといえば、微笑みながら彼女の頭をポンポンと叩き
肩に手を回していたのだ。

ふたりの姿は恋人同士そのもの。

どうみても自分と違い絵になるカップル。
どうあがいても、太刀打ちできなくて。

麻衣は、ぼんやりとふたりを視界に入れながら、
見せ付けられた現実から逃げるために
早く家に帰りたいと思った。

すると、視線に気が付いたのか
翔がカウンターの方に目を向ける。
一瞬だが視線が合った……気がした。

やばっ！

麻衣はカウンターにいる幸を手招きすると
見つけたかもと言ったが、
幸は別に慌てる風でもなく笑った。

「だったら、3つの選択ね。
ひとつは、今、青井翔の前に行って
『こないだのKISSは、なんだったのよ!』と張り倒す。
ふたつ目は、私が紹介する男と付き合う。
もうひとつは、あいつが見てる前を通って
負け犬みたいに家に帰ることね」

「さあどうする」

その中に、答えなんかあるはずはなく。

幸は半分面白がっているようにも見える。
麻衣の顔に自分の顔を寄せ、選択を迫ってきた。

「私は、ひとつめがいいわね。修羅場みたいで楽しそう」

「面白がらないですよ。私は、家に帰る。どうせ、負け犬だし」

大きなため息をつく幸に、麻衣は清算を頼んだ。

「じゃ、帰りなさい。

この状況で帰る度胸があれば…の話だけど」

挑戦的な言い方の幸は、

客に呼ばれカウンターの端へと移動してしまった。

ひとり残された麻衣は、

『度胸なんてあるわけないじゃない』と呟き、
そして、再び翔たちを視界に入れようとした。

その時。

「すみません。帰るので計算を。

あと、タクシーも呼んでくれる？」

すぐ近くで彼の声が聞こえたのだ。

うそお！

麻衣は驚きで声が出そうになったのを必死で我慢し

翔から見えない位置までじわじわと顔を反らし、聞き耳を立てた。

翔は、彼女の隣まで来て

店のマスターに声をかけていたのだ。

オーラを感じれるわけでもないのに、

彼が来たことで自分を取り囲む空気が柔らかく変わってゆく。

「素敵なお店ですね。前からありました？」

「はい、隣のビルの2階に入っていたんですが、
ここが空いたので、半年ほど前に移転しました」

「どつりで、気付かなかった訳だ。」

気に入ったので、また来させてもらいます」

「ありがとうございます。是非お越しください。」

それでは、こちらが本日のお会計でございます。

すぐにタクシーを手配いたしますので、

少々お席でお待ちください。幸、お客さまお会計です」

「はい！」

翔の顔を見て、幸の瞳が一瞬驚いたように丸くなったが、すぐに、仕事の顔に戻る。
テーブルの上においてある金額を書かれた紙を確認すると翔からお金を受け取った。

「少々、お待ちください」

「ああ」

幸は、麻衣のほうをチラリと見る。
何か言いたげな表情だ。

きつと、

『麻衣、あの女が恋人なのか私が聞いてあげようか？』
とでも言いたいのだろう。

そんなことをされたらたまらない。

麻衣は幸に向かって

ちいさくちいさく首を振った。

麻衣の身体は、カチンコチンに固まっていた。隣にいる翔を意識しすぎて居心地が悪いのだ。

だが、ここで、席を立つたら余計に怪しまれそうなので、帰る事も出来ない。

おまけに、彼がこつちを見ているかのような痛いほどの視線も感じていた。

やっぱり、正体がバレたのだと焦った。

「おひとりで来ているのですか？」

とつとつ話しかけられた。

だが、言葉が丁寧であり、バレてはいない様子でホッとすする。

視界の隅で、翔が自分の顔を覗き込もうとするのが分かり、麻衣は首を最大限まで回し、精一杯俯いて顔を隠した。もちろん、声など出せないのでも首を縦に振りYESと答えておく。

「確かにこのお店は女性客が多いから、

ひとりでも居心地がよさそうだね」

麻衣は、顔を引きつらせながら
幸が早く来るように願った。

彼女が来るまで翔は話しかけるつもりなのだ。

早く、向こうに行ってくれよう適当に頭を振っていた。

「だけど、ふたりだと

もっと居心地がよくなるんじゃないかな。

よかったら、この後ご一緒しません？」

はい？

何を思ったのか、翔が突然耳元で口説き始めた。

息で耳元の髪が揺れると

背筋に電流が走ったようにゾクンとする。

考えもせず、頭を縦に振っていた事に気が付いて、
慌てて頭を横にブンブンと振った。

翔は、一体何を考えているのか。

恋人連れなのに、

その女性の目の前で堂々と他の女性を口説いている。

最低の男だ。

あのときの自分も、この甘い口調にすっかり乗せられ、

逆上せ上がってしまったのだと客観的に見えてくる。

簡単にキスを許してしまったことを、

麻衣は後悔し始めていた。

「お待たせいたしました」

幸がようやく戻ってきて、

翔の視線が自分から離れたことに安堵した。

ピリピリに張っていた首の筋肉が痛くて

軽くマッサージしながらちよつとだけ元に戻す。

「タクシーは、すぐに迎えに上がりますので。
お席でお待ちください」

「ありがとう」

マスターの声が聞こえると、
両手を挙げて万歳したくなるほど嬉しくなった。

だが、ポンポンと肩を叩かれる。

それが、翔の手だと知ると麻衣は大きく肩をすくめた。

「このまま、待っていて」

あまりにも腹立たしく、
手で握りこぶしを作りギリギリと力を入れた。

軽々しい彼の態度に、
『誰に話しかけているのか分かっているの』
と振り向いて彼の顔を睨みつけようと思った。

だが、既に翔の姿はなく。

奥のソファから、
ジリジリと焼けるような女優の嫉妬の視線だけがあった。

「何話していたの？」

ソファアに戻ってきた翔の腕をグイッと引つ張り、麻衣にわざと聞こえるように女優の声が聞こえてくる。

「いや、別に」

「もう、私に嫉妬させたいのね。いじわるなんだから」

もう一度麻衣を見た女優の口元が、にやりと笑った。

「翔。これから、どうしよっか？」

私の部屋に來ない？それとも、ホテルに……」

その言葉を遮るように、

制服に身を包んだタクシーの運転手が店内に入ってくる。

翔の顔が見えそうになって、

麻衣はカウンターに視線を戻した。

幸が、慌しくふたり分のコートを持って

カウンターから出ていった。

あれこれとやり取りが耳の向こうで聞こえてくる。

カランというドアベルの音で、
もとの静けさに戻ったのだった。

「麻衣、もつと飲んでいったら？
今帰ったら鉢合わせになるわよ」

申し訳なさそうな表情の幸。
麻衣は頭を縦に振った。

「そうね」

あの時、負け犬のように帰っていたほうが

まだよかつたのかもしれない。

恋人を見せつけられ、堂々と二股をかけられた二重のショック。

麻衣の心は、まるで嵐が去った後のように
めためたに打ちひしがれていた。

第21話 「空似（そらに）」（前書き）

空似・・・血縁関係のない他人どうしの顔かたちがよく似ていること。

第21話 「空似(そらに)」

このまま、待っていて

翔の言うとおりになんかするつもりはなかった。

あの言葉は冷やかした。

女たらしのうえ、来るはずも無い男を待っているほど
馬鹿げた女ではないと自分に言い聞かせる。

お酒を1杯だけ飲みお金を払うと、

麻衣は『cocktail glass』の扉を開け外に出た。

いつの間にか、チラチラと雪が降っていて
寒さに凍えそうになりブルルと身震いする。
茶色のコートのをボタンを留めようとする
胸のところに虫食い穴を見つけた。

「最悪、虫に食われているし」

高校卒業のときに父から買ってもらった
一張羅のカシミアのコート。

『秋には防虫剤を新しいものに変えてね』
『そろそろ自分で管理しなさい』

今年春に言っていた母の言葉を思い出す。
全てを母任せにしていた罰なのだろうか。

麻衣は、歩道から道路へと視線を送った。
あれから時間が経っているためか、
どこを見ても翔の姿など見えず、
やはり冷やかしかつたことを思い知らされる。

夜の繁華街にはランプをつけたタクシーが路肩に止まっ
ていて、さつき翔と女優を乗せたと思われる
同じ制服の運転手が乗るタクシーもあった。

翔。これから、どうしよっか？
私の部屋に来る？それとも、ホテルに……

その言葉と共に、
翔と女優の仲睦まじい姿が浮かぶと、
この間のスイートルームを思い出した。

あの部屋で女優に最高の夜景を見せた彼は、
私にはなかった甘い愛のささやきを伝え
一夜を過ごすのだろうか。
そんな妄想を抱くと、
嫉妬のようなドロドロとした感情が心に湧いてきて
嫌になってくる。

「あー、やだやだ帰ろう！」

麻衣のため息は、
ネオンが光る繁華街に白い煙となって空に立ち上っていく。
バッグの中で主張するシャンパン色の携帯電話で
時間を確認すると、突然大きい壁が立ちはだかった。

「待っててって言ったでしょ」

その壁は、喋った。

ここにいるはずの無い翔の声で。

嫉妬のあまり幻覚まで見るようになったかと思いつつ、

眉間に皺を寄せた麻衣は、

その壁に沿って視線を上げていった。

「どうして、顔見せなかったの。僕だって分かってたんでしょ？」

それは、紛れもなく翔であった。

なぜか、彼だけが目の前にいて、

眼鏡を掛けた瞳でまじまじと麻衣の顔を覗き込んでいたのだ。

あの時、目が合った時点で

気付かれていたというのか？

彼から見られていると思うと、反射行動のように
コートの虫食い穴の部分を手で隠し俯く。
そして、もう一度辺りをチラチラと見回してみるが
一緒に居た女優らしき人はいなかった。

彼は、あの美人女優より私を選んだというのか？

そんな想いが浮かぶとのぼせ上がったように顔が火照っていった。

「気付かなかつたなんて言わせないよ」

今更、何が言いたいのかと思った。

我にかえった麻衣は、

気持ちを引き締め不快感を顔いっぱいに出し、
通せんぼしている彼の横をわざと通り過ぎた。

「どろして他の女性といちゃいちゃしてるのだから。
むかつく!……」と思ってるのか

「『むかつく』なんて、思ってません!」

『嫉妬はしたけど』

なんて言えないまま早足で歩き始めると、その横に翔が並ぶ。そして、麻衣と同じペースでついてきた。

「ふうん、嫉妬して僕の顔が見れないのかと思った」

気持ちをこと細かく言い当ててくる彼に
嫌気がさして歩を止める。

「あんな綺麗な恋人がいる前で、
他の女性を口説くなんてあり得ないでしょ！
何を考えているんですか？」

「恋人だって？」

「でしょう？だって、肩抱いたり、
仲良さそうにしてたじゃないですか」

私の基準では、それは恋人行為にあたること。
それっておかしい？

そんな気持ちを含めてジロツと睨み返したが、
彼にはそんな視線など痛くも痒くもないようで、
のん気に微笑んだ。

「彼女は、今度共演するただの女優さん。
まあ、僕的にはそう思っているけど?」

『ただの』という言葉に心底ホツとしたが、
ただの女優に思わせ振りの態度を取り続けた
彼の恋愛観念が分からなくなる。

自分自身もそんな風に思われているのかもしれないと考えると怖く
なった。

「だけど」

そんな翔の言葉に彼を見つめる。

「やっぱり……麻衣ちゃん、僕らのこと見てたんだ」

「あっ」

誘導尋問に引っかけた事気付いた。

自分で自分の嫉妬行動をバラしてしまったのだ。

翔は、いたずらっ子のような瞳でじっと見つめていて。

「め、目に入っただけです」

「…そう?」

麻衣と視線が絡み合うと目を細め笑った。

「それで、これからどうしようか?」

足並みを揃える翔は、
麻衣の掌に自分の手を滑り込ませギュツと握り締めてきた。
恥ずかしさに振り解こうとしても離してはくれない。

彼の手はやけに冷たくて、
麻衣が出て来るまで外で待っていたのが伺えた。

どうして女優を送り、
そのまま『cocktail glass』に戻ってこなかったのか
不思議に思った。

「もちろん帰ります」

「どうして帰るの？もうちょっと飲もうよ」

「もう飲みません」

飲まないのではなく、飲めないのだ。
これ以上飲んだら、
アルコールに吞まれ彼の甘い誘惑に負けそうで、危険である。

「飲まなくてもいいから、どこかお店に入って温まろう。
こんな雪の中、ウロウロしていたらふたりとも濡れ鼠になる」

頭をポンポンと叩かれると粉々になった雪が宙に舞った。

いつの間にか激しさを増した雪に驚く。

彼の肩に積もった雪に再び寒さを感じた麻衣は
翔の言葉に従うしかなかった。

「あれ？翔じゃないか」

通りすがりに入ったお洒落なバーは
『cocktail glass』とは
違いエキゾチックな雰囲気醸し出していた。

そこに入ってすぐ声をかけてきたのは、柳谷飛鳥。
所属する劇団の友人という男性と飲みに来ていた彼は、
翔の隣にいる麻衣を見て首を傾げた。

「どこかでお会いしましたよね？」

胸の虫食い穴を抑えながら、
『monster』のプレミアシートで観劇したことを話すと、
飛鳥は笑顔に変わり大きく頷く。

「そうそう、思い出した！」
翔は、観客の女性なんて興味持たないけど、
君の事は凄く気になっていたみたいだね
『今日のプレミアシートは、“上条リリカ”^{リリカ}似の子』
って言っていたんだよ」

上条リリカ？

もちろん、赤の他人。

だが、名前はどこかで聞いたことがある。

モデルだったか女優であったかは定かではなく。

自分の病のことを書き綴った本が

ベストセラーになったことだけはなんとなく知っている。

そう言われてみれば、

過去に似ているなどと言われたこともあったっけ？

翔が自分のことを気にしていたなんて、

凄く嬉しいことではあるのだけれど、

『有名人に似ている』というのはちょっと邪魔な言葉であった。

「飛鳥、デートの邪魔をしないでくれ。

麻衣ちゃん、コートを貸して」

余計だと言わんばかりに

煩わしそうに飛鳥の言葉を止めた翔は、

麻衣にコートのボタンを外すように声をかけた。

オロオロしながらも

虫食いの部分を人目に触れないようにボタンを外し、

隠しながら翔に渡す。

だが『cocktail glass』と違いセルフサービスで、

翔は棚からハンガーを取ると麻衣のコートを広げていく。

その際、胸の辺りにチラツと視線を落としたが、

何もなかったかのようにハンガーにかけ、

自分の首に掛けていたマフラーで穴が隠れるように覆った。

さりげないその行動はため息が出るくらい感心した。

それと同時に、恥ずかしさで逃げ出したくなる。

気付かなかったとはいえ、穴あき服を着ている

自分の貧乏臭さを彼がどう思ったのかがとても気になった。

「失礼、失礼。麻衣ちゃん。ごゆっくり」

飛鳥の興味津々の視線を一身に浴び続けている。

麻衣は、翔から背中を押さながら

空いた席へと誘導されたのであった。

第22話 「意外な展開」

「少しは、温まったでしょ」

触れられた手をパツと引くと、困惑した様子で翔が苦笑した。

「完全に嫌われた？」

嫌っているのではなく、意識しているのだ。

『観客の女性なんて興味持たないけど、君の事は凄く気になっていたみたいだね』

第三者であり、翔の恋愛事情を知っていると思われる飛鳥の発言は、かなり意味深で。

心のボルテージは上がりっぱなしになっている。

「嫌ってなんかないですよ。
でも、あの女優さんとも仲良さそうだったし、
誰にでもこんなことやっているんじゃないですか？」

結局、翔の言葉に乗せられて飲んでしまったアルコール。
気に入ってしまったのもう3杯もお代わりしてしまった
甘口のカシスオレンジマティーニは、
頭の芯をほんわり麻痺させていて、口達者にさせてゆく。
本音を言っても無礼講、そんな気持ちにさせられた。

「嫌ってないなら良かった」

肝心の答えは返さず、
クスツと笑うと彼は子供みtainな表情で
麻衣の顔を覗き込んできた。

翔自身もアルコールが回っているようで耳と首筋は、
ほんのり赤く色づいている。

「質問ですから、ちゃんと答えてください」

今日こそは、負けないことをアピールするために彼の顔が間近に見えても怯むことはしなかった。

出会った時以来、久し振りに見た彼の眼鏡姿。

それは伊達眼鏡ではなく少しばかり度が入っている。

意志の強さを表すような凛々しい眉毛に

二重の大きな瞳がすぐ間近に見えると、

こんなに接近できる女性は自分だけであって欲しいと願った。

「そうだね。好感持ってくれる人に優しくするのは当たり前でしょ」

その優しさが女性を勘違いさせることを彼は分かっているのだろうか？

さっきの女優だって、

恋愛ド素人が分かるくらいの嫉妬心をメラメラと見せつけていたではないか。彼だって分かっていたはずだ。

この甘いマスクの裏は
とてつもない悪魔が居座っているのかもしれないと思うと、
化けの皮を剥がしたくなった。

本田や幸の言葉に血中アルコールが加わり、
麻衣の背中を後押しした。

「じゃ、恋人以外でもこんなこと出来るんですか？
好みのタイプじゃなくても……好感持つてくれれば、
キスとか平気で出来たりするんですか？私のおときみたいに」

核心に触れると、すぐ近くにあった翔の顔が少しだけ離れた。
表情には出なくても
彼の心の何かしらの動揺が伝わってくる。

「出来たとしたら？」

少し間を空けて、翔はゆっくりと答えた。

「一発殴って帰る？」

彼は、否定しなかった。

それは、自分が翔のタイプでも恋人でもないということだ。

自分が掘った落とし穴に見事にはまった気持ち。

殴って帰る力なんてなく無く胸の辺りをパンチで殴られたような、ノックアウト寸前の境地だった。

「ごめん、ここは冗談では交わせないか」

きつと、今の私の表情は、とんでもなくぶさいくなはずだ。
泣くまいとしている人の顔なんて、
好きな人には見せられない。

翔は、マティーニを一気に飲み干すと店員に追加を頼む。
アルコール度が強かったようでふうっと長い息をつくと、
赤く潤んだ瞳を麻衣に向けた。

「今の君は、僕にとって今一番気になっている女性だ……じゃないとキスなんかしない」

えっ！えっ！

あまりのショックで、
自分が現実逃避の妄想の世界にでも入ったのかと思った。
なんだか、思っていた事と展開が変わっている。

翔の言葉は、一種の告白じゃないかとも思えて。

「だけど……」

言葉を搜しているのか、それとも眠いのか、
翔は右手で眼鏡を外し目を擦ると再びかけなおす。

「自分でも良く分からないんだ。

それが愛だとして、恋人として君を受け入れて本当にいいものなの
か。

正直迷ってる。僕自身の問題でね」

彼は悪魔じゃなくて、恋愛に臆病？

女性の扱いが上手そうな彼から

そんな発言が飛び出すなんて信じられなかった。

なんて答えたらいい？

脳は、最適な言葉を探すためにフル回転する。
だが、パニくっていて賢い言葉など浮かんでこなかった。

「誰だって、最初は臆病です……でも、迷ってるんだったら
踏み出してみてもいいんじゃないですか？」

意外にうまく進めるかもしれない……駄目だったら、それまで。
でも、何とかなるモンです。

恋愛のことには当てはまらないかもしれないかもしれませんが

……私の人生観だと思って聞いてください」

「あつ……人生観と言っても、私は失敗ばかりしてますから。
あんまり説得力は無いかな」

半人前が言う一丁前の言葉。

言いながら恥ずかしくなり、クスクス笑って誤魔化した。

両親をなくしても借金を背負っても、

今のところは平穩に暮らしている。

決して巧く歩いているとは思えないが、

足を踏み出すことに意義があるのじゃないか。

そんな意味で言った言葉であるが、

彼には自分を押し売りしてるようにとられそうである。

だが、何かに迷っている彼を解放させてやりたい一心で探した言葉だった。

彼が、楽になればそれでいいのだと思った。

「……そっか、それが、麻衣ちゃんと僕の根本的な違い……」

「ん、何ですか？」

近くのグループ客から笑いが起こり、彼の声が途中で消される。

呟いた彼の言葉が聞こえなくて訊ね返したが、

彼は微笑むだけでその言葉を復唱することはなかった。

第23話 「お持ち帰り」

「だ、大丈夫ですか？」

「大丈夫！タクシーに乗ろう」

あの後からペースアップし飲み続ける彼を何とか止めた麻衣は、足元がおぼつかなくなってしまった翔を支え店から出た。飛鳥がいれば、彼に翔を送り届けてもらうつもりだったが、いつの間にか帰ってしまい頼る人は誰もいなくて。

「久しぶりにいい酒が飲めた。ありがとう麻衣ちゃん」

彼って飲むとこんなになるのか。

鼻歌交じりの上機嫌な翔は、周りの目も気にせず
麻衣の肩に手を回し引き寄せてくる。

雪の歩道と彼の千鳥足に負けないように歩くので必死だった。

「あ、あれに乗ろう！」

自分の胸に抱き寄せながら、彼は手を挙げタクシーを呼ぶ。

されるがままドキドキしながら

路肩に寄せてくるタクシーを待った。

「お客さん、今日は雪で大渋滞しているので、

着くのにかなり時間がかかると思いますよ。

歩いた方がいいんじゃないですか」

ワンメーター程度の自宅。

麻衣が住所を伝えると、運転手は料金が高くなるのでと歩きを勧めてきた。

「翔、私は歩いて帰るので、そのまま自宅へ帰ってください」

そう言つて、車から降りようとする。

タクシー料金がかさむなら、翔が寄り道せずスムーズに帰れるようにと気を利かせたつもりだったが、翔は拒否し、麻衣の腕を掴んだ。

「時間かかっても大丈夫だから。車出して、運転手さん」

「はい、分かりました」

「支払いが僕がするから、心配するな」

翔は、まったく…という表情で麻衣の頭をくしゃくしゃ撫でる。口調から怒ってるかもと思ったが、彼の表情は穏やかであり。

「こんな夜道、女の子ひとりで帰せるわけないだろう」

そう言いながら、ポンポンと頭を軽く叩いた。

タクシーは、チェーンの音を高らかに鳴らしながら進み始めた。運転手の言とおりで、すぐに車は渋滞に^{はま}嵌り動かなくなった。

この数年、こんな銀世界を見たことは無かった。雪は豪雪地帯のように降り続き、回りの車は全て白い車に変化している。

隣の翔はと言うと、睡魔が襲ってきているようで、席に背も垂れたままふわふわと欠伸^{あくび}をしていた。麻衣の視線に気がつくとうっすら笑みを浮かべて、

反対側の肩に手を伸ばし引き寄せた。

「……ちよつと、仮眠してもいい？
最近忙しかったから睡眠不足だね。着いたら起こしてくれる？」

「飲みすぎた」そう呟くと翔が頭を肩に乗せてきた。

彼の髪が麻衣の頬に当たり、
ヘアワックスの香りがほのかに匂うと、
その香りに心地よさを感じてしまいつつとりとする。

気を使っていないからか、彼の頭はずっしり重く肩を押す。
時折、彼の頭がカクンと揺れると、
その頭を肩から落とさないよう、受け皿のようにその頭を守った。

きつと、明日は肩こりしているだろう。
でも、それはそれで嬉しい悲鳴になるに違いなかった。

しばらくすると、翔の寝息が聞こえてくる。
まるで、子供のように無防備な姿であった。

「翔！」

「翔！翔さん！着きましたから、私降りますから」

翔は、麻衣の肩でぐっすりと眠っていた。

彼の財布からお金を出すわけにもいかず

ギリギリの予算で一旦清算し、彼の肩を揺するが全く起きてくれず。

「翔、お家はどこです？ねえ」

タクシーの運転手がバックミラーで私達を確認している。
困ったように顔をしかめると言った。

「お客さんの恋人でしょ？雪降っているし、
車で眠られちゃこちらとしても運べませんから、
ここで降りしてください。あなたの家に泊めたらいいじゃないです
か」

当然、この運転手に麻衣達の事情など分かるはずもなく、いきなり男を泊めると言い出した。もし、自分の娘だったとしても同じ事を言うのだろうかと思いつつ、声を荒げた。

「駄目。そんな無理です！翔、起きて」

必死で起こそうとするが、どこまで熟睡しているのか返事は寝息だけで。

「あなたの家までは手伝いますから。お嬢さん」

ため息をつきながら、運転席から出てきた運転手は後部座席のドアを開ける。

慣れた様に翔の身体をパンパンと叩くと耳元で声をかけた。

「お客さん！自宅に着きましたよ。帰りましょうー！」

「う…ん」

翔は、うつすらと瞳を開け体をゆっくりと動かした。

「ほら、起きた！！違うここは私の家なのよ！
翔、お家はどこ？住所教えて」

家に持ち帰るなんて、とんでもなかった。

明日の朝、翔を見つけたときの妹達の絶叫と質問攻めが脳裏に浮かぶ。

「あ、麻衣ちゃん……え、麻衣ちゃんの家？」

重たそうに体を起こすと、翔は辛そうに顔をしかめた。

起きてくれてホッとす。

後は、彼が自宅住所を言ってくれれば

運転手が勝手に連れて行ってくれるのだ。

しかし。

「あ、お客さんが来た。乗ります？

どござ、どござ！こちらのお客さん降りますからね！！」

「ちよっ」

運転手は、ここぞとばかりお客を呼び込んだのだ。
いらないとばかり、さっさと翔の腕を引っ張る。

「彼氏さん、今日は彼女が泊めてくれるって。よかったですね」

運転手の無情な言葉、麻衣の言葉など完全無視だった。

「こっちこっち」と言いながら、

まだ意識がおぼろげな翔の腕を麻衣の肩に回させる。

「お嬢さん。後は、任せましたからね。任せましたよ！」

しっごく、しっごく、

まるで、サイレンのような声を残しながら、
運転手はタクシーへと戻ってしまった。

「うそ……。いわゆるこれがお持ち帰り？」

男性が女性を…というのは漫画でも見たことがあるがこんな逆パターンは、見たことも聞いたこともなく。

麻衣は、消え行くテールランプを睨みつけながら、タクシーを見送る。
辺りが静かになると、麻衣の肩で再び眠りこけようとする翔を見つめた。

「しょうがないわね」

意を決めた麻衣は、
自分の手を彼の背中に回し、しっかりと引き寄せた。

「ここは、私の家、もうちょっと頑張って、翔」

「う…ん？まい…ちゃん」

酒がまわっているのだろう。

グッと翔の体重がかかりふらつく。

ふたりは、雪の光で浮かび上がる古びた家に向かって
歩き始めた。

第24話 「疑惑」

「もつちよつとだから頑張つて」

玄関から家へ上がると、翔に一声掛けた。
廊下の電気をつけ、暫し考える。

彼をどこに寝かせるかで悩んでいたのだ。
目の前にはリビングがあるが、
そこに布団を持ってきて敷く余裕はなく。

一番楽に寝かせられるのは隣にある麻衣の部屋のベッドなのだが、
カーテンで仕切った向こうには妹達が寝ていて、
翔が一声出せば直ちに栗本家を震撼させる事件に
発展すること間違いなしであった。

「まだ寝ちゃ駄目ですよ」

迷った末、寝心地は最悪だが
彼にはリビングのオンボロソファに寝てもらうことにした。
錆び付いてギギギと音が鳴るドアを開け翔を誘導し、
暖房のスイッチをONにする。

なんとかコートを脱がせ、マフラーを取り、
黒塗りのソファに体を傾けるとその大きな体は
まるで岩の様にゴロンと転がった。

「ふう〜疲れた」

緊張の緩み、そして、疲れと酔いが
翔を寝かせた途端麻衣の全身に一気に襲ってくる。
へなへなと翔の前に座り込むと彼の顔を眺めた。

「翔って、目が悪いのね」

倒れた反動で斜めにずれた眼鏡が、彼らしくなく情けない。

「こんな姿、ファンが見たら興奮しちゃうよ」

それもちょっと可愛く見えるのは恋のせいねとにやけながら、その眼鏡に手を掛け外し、表から裏から観察するとちよつと自分の目にかけてみる。

今の今まで彼の肌に触れていたそれが自分の肌に当たると、彼の一部に触れたようでドキドキした。

「うわっ」

強い度ではないとはいえ、両眼1.5の麻衣の目にはちよつときつすぎて慌てて外してしまった。

翔と出会った時は、裸眼だったはずで。

あの時、翔の瞳に自分の顔がどんな風に映っていたのかちよつと興味湧いた。

「あとは、毛布っ」と

高校生の麻由が受験勉強で羽織っている毛布がソファアの横に無造作に置いてあり、

それを引っ張ると翔の体にかける。

毛布から手を離すと、グツスリ眠る彼の寝顔をぼんやりと眺めた。

「かつこいい」

スツと伸びた鼻筋に引き締まった唇。

茶色い前髪の奥に見える大きい瞳は

綺麗な弧を描いて閉じていて。

このまま化粧をして女形として出演させても

十分にいけるのではないかと思うくらいだ。

そんな彼がどうしてこんな自分を気に入ってくれているのが
未だに分からない。

そんなことを彼の寝顔に問いかけながら、

麻衣は穴が開いてしまうんじゃないかと思うくらいに

彼の顔をじっと見つめていた。

「う…ん…」

その視線が分かったのか、それとも寝ぼけているのか、
声を上げた翔がうつすらと目を開けた。

ドキドキと胸は高鳴りはじめ、
離れようにも身体からだの気だるさに負けて動けない。
彼は、天井からふたりを照らす蛍光灯に視線を向け、
そしてゆっくりと麻衣の方へと移した。

「おいで…」

翔はそう言つと麻衣の頭をポンポンと叩き、
くしゃくしゃと撫でる。
そして、後頭部に手を回し自分の胸に引き寄せた。

翔の胸に麻衣の耳が当たった。

彼の心臓の音はゆっくりゆっくり脈打っていて、
その振動が脳全体に響いてゆく。
暖かい彼の体温も合わさって、

まるで、お腹の中にいる赤ちゃんのような
安らかな気持ちになっていた。

身も心も癒され、睡魔が麻衣を支配してゆく。
景色がぼんやりと揺らいだ。

「りりい……」

翔が、ゆっくりと言葉を發した。

彼の声は、聞いた事がない甘いささやきで。
胸がキュッと縮み上がる。

なんだか分からないまま麻衣は顔をもたげた。

「夢の中なのに…君は温かいんだな」

翔は、ボンヤリと視線を向けたままだ。
夢じゃないのに彼は夢の中だと勘違いしている。
生身の人間だから温かいのは当たり前と心の中で突っ込みを入れた。

「だけど……これでさよならだ」

「え？」

何がさよならなのか？

瞳は開いているのに、まだ彼は夢を見ているのだろうか？
もしかして、寝ぼけた振りをして私を振っているのじゃないかと思
った。

「翔……？」

寝言に返事をするのはタブーだと知りながらも、
彼の名前を呼ぶ。

それでも彼の瞳はおぼろげなままだ。
意識が混濁しているのだと思った。

「本当にさよなら…だ。…りりい」

頭をポンポンと叩かれ、くしゃくしゃと撫でられる。

「りりい……って」

名前だ。

麻衣は直感でそう思った。

彼は女性の名前を呼んだのだ。

それもただの人じゃない。

あの甘い声色……テレビでも麻衣の前でも出さない声。

麻衣は翔の胸に顔を埋め、

自分の胸倉をぎゅっと掴んだ。

翔は……君の事は凄く気になっていたみたいだね

『今日のプレミアシートは、
”上条リリカ”^{かみじょう} 似の子
って呼んでいたんだよ。』

りりい。

飛鳥の言葉と翔の声が、
何度も何度も頭を交差した。

上条リリカ……。

ひとつの仮説にたどり着いて、手が震えてくる。
翔は、私を上条リリカに重ねているのじゃないかと。

第25話 「せつなくて、切なくて」

上条リリカは、翔の恋人だったのか。

何かの理由で一緒になれなかったふたり。
翔は彼女に未練を持っていて。その時、彼女に似た私が現れた。

それが愛だとして、恋人として君を受け入れて本当にいいものなのか

正直迷ってる。僕自身の問題だね。

彼は、悪魔でもなく、臆病でもなく……。
自分を元カノと重ねている罪悪感に襲われているということなのか。

声をかけるまもなく、再び翔の寝息が聞こえてきた。

それは、全て妄想だ。
もしかしたら、全く違うのかもしれない。思い過ぎなのかもしれない。
だが、ひとつだけ言えるのは、上条リリカが何らかの鍵を握っているということであり。

一度考え始めたら、思いは悪い方向にばかり進んでいった。

「胸が苦しい……痛いよ」

後頭部は、彼の掌が覆ったままであった。

いつの間にか心地よくてたまらなくなっていたこの頭を叩く行為さえ、

麻衣の向こうにいる誰かに向けられているものじゃないかと勘繰ってしまふ。

翔の恋人でもないのに、姿無き女性に嫉妬している自分が嫌だった。

「おね〜〜〜ちゃん!!!!」

「は、はい。本田さん、ごめんなさい!」

麻衣は、何度も何度もから揚げ作りに失敗する夢を見ていた。簡単なはずなのに、油で揚げるとすぐに真っ黒になるのだ。

突然の大声に驚いた麻衣は、自分の妹の声を本田の声と間違え返答していた。

ぼやけた視界がはつきりして、現実が分かる。

慌てて翔が寝ていたソファーを見ると誰もいなくて。

彼に掛けていたはずの毛布が自分の肩に掛けられていた。

もう、彼は帰ったのだろうか。

「ああ、よかった。麻由、おはよう」

片手に箒、片手に蠅叩きを持ち仁王立ちでソファアの裏側に立っている高校生の妹 麻由まゆの表情は、驚きに目が飛び出さんばかりに見開いていて。

「おねえちゃん洋服のまま寝たの？呆れた。それに、のん気におはようじゃないわよ。誰なの！！あの男」

「あの男？」

ソファアの背もたれにかけたままの翔の黒いコートが目に入り、ドキンと心臓が止まりそうになる。彼はまだいるのだ。

「そう、カレーピラフを作ってる男よ！」

「翔！」

毛布を投げ捨て、立ち上がると

テーブルの角に足をぶつけながらキッチンへと向かう。

「あいたたた」と足を引きずり声を出しながら、台所へ入るドアを開けた。

「おっ、おはよう麻衣ちゃん。

勝手にキッチン使わせてもらっているよ」

翔は振り向き麻衣の顔を見ると、屈託の無い笑顔を見せた。

「お、おはようございます…」

昨夜のことを思い出し、

何かしらの切ない感情が胸に込み上げてくる。
苦笑で返すとペコリと頭を下げ、他人行儀に挨拶をした。

「このイケメン、おねえちゃんの知り合いなの!!」

「誰よ、あれえ」

麻衣の後ろに隠れるように麻由が声をかける。
麻紀もパジャマ姿のまま顔を覗かせた。

「あれ、僕の知名度、学生にはまだまだだね」

ふたりの反応に翔は笑い飛ばしながら、
器用にフライパンから4つの皿に盛り付けする。
わかめがあつたからとわかめスープまで作っていて
お椀からは温かそうな湯気が出ていた。

「はい、どうぞ召し上がね。泊まらせてくれたお礼だ」

「泊まったあ〜〜?」

妹達の声が耳にキンキン響く。

「そつだ、この声、この間の電話の人だ。」

もしかして〜〜おねえちゃんの恋人ですか?」

「ちよ、ちよつと麻紀」

そんな答えにくい質問はしないで欲しかったが、好奇心旺盛の中学生に遠慮なんて言葉は無く。

「いいから、食べなさい」

と、その言葉を誤魔化すようにふたりを追いやった。

翔は、ニコニコしながらふたりにスプーンを渡す。
そして自己紹介した。

「僕の名前は、青井翔。」

一応これでも俳優で、来春月9のドラマに出る予定。
おねえちゃんの恋人候補のひとりだ」

「え〜〜、嘘。そんなにもてるの!?!?!」
と外野がうるさい。

「ちよつと、信じるでしょ。嘘つかないで下さい」

信じられなかった。

あんな甘い声で他の女性を呼んでいたくせに、
今は、私の恋人候補に摩り替わるずるい男であった。

「翔は、私の友人で昨日飲みに行ったの。

彼が酔いが回ってひとりじゃ帰れなくなったから、ここに泊めたのよ」

「そういう訳！」これ以上質問させないように話を終わらせ、
さっさと椅子に座り、カレーピラフを食べ始めた。

「意識しまくり〜おねえちゃん」

「友達じゃ、ありえないね。こんな行動」

自分を分かっている身内がいると凄くやりにくい。
上目遣いでチラリと翔を見ると、
案の定お腹を押さえて笑いを我慢しており。

「姉妹間でも、いじられ役みたいだね」

そう言った。

想像していた通り、ふたりの妹から翔は質問攻めにあっていた。だが、妹達の質問は、今流行のアイドル歌手のことばかり。職種が違つのでタジタジになるかと思えば、翔は何でも知っていて。面識が無くとも、俳優仲間やモデル仲間から仕入れたというレアな情報を教えてくれた。

「翔お兄さん、すごい」

すでに、憧れであつた兄貴を持つた気分のように。翔は彼女らの心をもガツチリ掴んでいるようである。

「そっか。じゃ、次は翔兄さんの事。月9のドラマってどんなの？主役？」

突然、麻由が翔の事を聞き始めた。

麻衣は、スプーンの動きを止めると翔の横顔を見つめる。

悲恋だとは聞いたことがあるが、

彼がどんな役をするのか、どんな物語であるかなど詳細は知らない。
だから、興味津々で彼のひと言を待った。

「300万部売り上げた『ひだまりのうた』という本があるのを知ってる？」

「知ってる知ってる。友達から貸してもらったけどあまりにも可哀想で涙が止まらなくなったの。」

最後まで読めなくて、途中まで読んで返しちゃった」

読書好きの真由が、身を乗り出してその話題に食いついた。

妹が言うには、人気モデルの闘病記。

全身を癌に犯されても生きる希望を捨てない女性と
その人を支え続ける男性の姿が書いてあるらしくて。

「そつ。で、僕がその男性役。」

献身的なところが適役でしょ？麻衣ちゃん」

「どうして、そこで私に振るんですか」

頭をポンポンと叩くと、くしゃくしゃと撫でられる。

そんな仕草から、条件反射のように女性を呼ぶ彼の甘い声を思い出すと

悲しさが湧きあがってきて鼻がツンと痛くなった。

慌てて、彼から視線を外すとスプーンを動かす。

切なくてたまらなくて。

だが、努めて冷静に返事した。

「適役ですか？女優さんは見た目と違ってイケイケだし、男優さんは、軽すぎるし。」

そんな献身的な役、本当に出来るんですか？」

「きついなあ」

彼の冗談を皮肉で返した。

自分で言っておきながら、昨夜の仲睦まじいふたりの姿が蘇った。

例え演技とはいえ、テレビの中まで

あんな姿を見せ付けられる事になるのだと思うと、

麻衣は憂鬱になるばかりであった。

第25話 「せつなくて、切なくて」 (後書き)

今回、1話が長くなってすみません。
流れるに、途中で切れませんでした……。
頑張って読んでください〜 (内海)

第26話 「正式な恋人」

「私の父は、がたいの大きい人でしたから。サイズは合うと思います。ちよっ！」

朝風呂に入る翔に父の着替えと、使い捨ての歯ブラシ、T字カミソリを差し出した麻衣は、慌てて顔を背けた。なぜなら、洗面所の鏡の前に立つ彼の上半身は裸であったのだ。キョロキョロと妹達を確認した後、後ろ手に扉を閉めた。

「翔、未成年の妹達もいるから、その格好で出てきたりはしないでください。」

どうして、もう脱いでいるんですか！」

その裸体を見ることが出来ず、背を向ける。バクバク弾けそうなくらい心臓に負荷がかかり、

のぼせた様に頭までくらくらしてくる。
父とは全く違うその姿に、異性を意識せずにはいられなかった。

「ごめんごめん。腕に掌の跡がついてるんだ。
麻衣ちゃんの握力つて凄い？」

「凄くないです。違います！」

「ほら、ここ。ちょっと見てくれる？」

そう言われてじわじわと振り返り、
片目を閉じながら彼の筋肉質な腕を見た。

翔は夜の出来事など全く忘れていたようであった。
その跡はタクシー運転手がつけた跡。
本当に降りてもらいたかった気持ち
そのしつかり付いた手の跡に表れていた。

「それは、タクシーの運転手がつけたものです。
全然覚えてないんですか？その…夜の事」

翔は、頭を傾げながら衣類を受け取る。
結局は思い出せないようで、苦笑しながら「まったく」と返事した。

「覚えているのは、タクシーに乗ったところまでかな」

……と、言うことは、あの甘い声色で呟いた言葉も覚えていないと言うことだ。

アルコールの恐ろしさをまざまざと見せ付けられたような気がした。

「もしかして、僕何かした？」

今日の麻衣ちゃん、なんだかよそよそしいと思っていたんだ」

そう言いながら、視線が麻衣の顔から下り始めた。

肉体関係だと大きく勘違いしている彼の視線を掌でカットした。

「ち、違います！」

「じゃ、なんか言ったんだ。失礼なこと？」

彼は、面と向かって他の女性の名を呼んだ事など覚えていないはずだが、言い当てられてドキッとした。

彼は、私の心の揺らぎに気付いているのか。

きつと、この胸の中のどす黒いもやもやしたものが、

他人にも感じ取れるほど表面化しているのかもしれないと思った。

『私のこと、りりいって呼んだじゃないですか。』

それって、上条リリカさんじゃないんですか。もしかして、翔の恋人？』

ここで、上条リリカのことを話して、馬鹿だな関係ないよと安心を得たい

……刹那、そんな事も思っては見たが、
素面の自分には出来ない諦めた。

「いいえ、別に。じゃ、ごゆっくりどうぞ。
なんでも適当に使ってください」

洗面所の密室空間はよくない。

あまりにも近すぎて、自分の心全てを見透かされそんな感覚に陥る。
息も苦しくなってきた、早く抜け出さなくなった。

「ああ、ありがとう。あつ、麻衣ちゃん。
これ曇るといけないから預かっていて」

だが、彼は引きとめた。

裸体が目に入らないように薄く目を開けたまま彼を見ると、
翔は眼鏡を取り麻衣に渡した。

眼鏡を掛けた彼の優等生なイメージ（もちろん首から上）は、
裸眼になった途端、テレビでも良く見る
ちよつと眼力の強い俳優の彼へと変化していった。

「どのくらい見えるんですか？私の顔。目が悪いんですよ」

眼鏡を受け取ると、自然と彼に声をかけていた。

夜中に思った疑問をぶつけている。

こんな他愛も無いことはスラスラ言えるのに、と悲しくなった。

「ん？僕の目……それほどでもないよ。
私の顔は…目がみつつ、口がよつつかな？」

「だから」

頬を膨らませ怒ったフリをすると、
ククツと笑った翔が顔を近づけてきた。

「ちょ、ちょっと」

「麻衣ちゃんの顔。くつきりはつきり見たいんであれば、この辺り。
ヒューマンスペースで言えば『親密ゾーン』かな。
1メートル離れば、ちょっとぼやけて見えるね。
……でも、何を着ていて誰かくらいは分かるよ」

今の翔からだいたい60センチメートル位の距離。

『おっで…』

甘い声で囁かれた距離よりもはるかに短かった。
上条リリカと関係ない証拠を何とかして見つけたかったのだが、
願いは空しく届くことはなかった。

「そう、弁当屋って時間差出勤なんだ…ちょっと失礼」

朝、6時から夜8時までの勤務時間。

今日はちよつど良く午後出であったので、
翔とともに早めの昼食をとり自宅を出た。

昨日の雪は嘘のように融けていて、路肩や屋根上に残るだけ。

さんさんと降り注ぐ太陽光線に眩しさを感じながら、流しのタクシ
ーを拾った。

弁当屋の住所を伝えると、車はゆっくりと発進する。

数時間前に麻衣の肩で熟睡していた彼は、
父の私服を着て携帯で誰かと話していた。

「撮影が、河川敷に変更だつて？」

時間は、まだ分からない？そう……今出先だから、また僕から連絡
する」

翔は、電話が終わると深いため息をつき、窓の外に視線を向けた。

彼の黒い瞳に街が流れてゆく。

愁うれいを含んだようなその瞳に、彼の影の顔を見た気がした。

「あ、そうそう」

彼の表情は、すぐにいつもの優しい顔に戻った。
右手を麻衣の前に差し出すと、「携帯」と声を出す。
何の意味が分からずにキョトンとしていると
翔の黒い携帯電話のディスプレイに
電話番号とメールアドレスを表示させ、麻衣に見せた。

「携帯、持ってたでしょ。貸して」

「えっ」

「僕の携帯登録しておくから」

「あ、はい」

バッグに入っている携帯を取り出した。
麻由、幸、本田に引き続き4人目の登録者。もちろん男性は初めて。
言われるままに翔に手渡すと、違う機種なのに器用にボタンを押し始めた。

彼は、液晶を見つめながら話をした。

優しかった表情が、次第に消えてなくなり。
なんだか怖いくらい。

「僕は、仕事柄女性と接する機会が多い。演技とはいえ、抱いたりキスしたり…。君が軽いと言っていたことも、平気でしなければならぬ。事務所が掲げる僕のイメージは、女性達を翻弄させるような遊び人。これから芸能界で生き残っていくために、インパクトある個性を作り上げていくことになるだろう」

芸能界ってそんなところ？

いきなり話し始めた華やかな光の裏の闇に、言葉が出なくなる。

パタン

登録が終わったようだ。

携帯電話の閉じる音が、翔の話を中断させた。

「今のは、前置き」

彼は、そう言って麻衣の掌に携帯を戻した。

翔は、そのまま麻衣の顔を見つめる。

怖かった表情は、次第に柔らかくなっていった。

「昨日、君に言われた事で、少し気が楽になったんだ。自分の思いのまま、一歩踏み出してみようかと思った」

「本当ですか！」

嬉しかった。

気の聞いた言葉ではなかったにしろ、楽しみたい気持ちが伝わったのだ。

少しでも翔の道が開けたことに安堵した。

彼は一息つくと、膝に置いていた麻衣の手に自分の掌を乗せ、ギュツと握った。

「苦勞をかけることもあると思う。

だが、それでも麻衣ちゃんが良いと言っているのであれば

……付き合おう。恋人として」

耳を疑った。

翔からの告白。
柔らかいと言っても、彼の表情からいつもの冗談ではないことが分かる。

「どう？返事保留でも構わないけど」

タクシーは、交差点の角を曲がった。
オフィス街の大通り、弁当屋が見えてきた。
麻衣はどうしようかと心の中で連呼する。
凄く嬉しくて、体は震え鳥肌まで立っているのに、
重々しかった彼の言葉に二の足を踏んでしまっていたのだ。

彼の言葉を、もう一度思い返していた。

苦労だといってもあくまで仕事の域だけ。
それが、プライベートまで持ち込まれることはない。
大丈夫、一歩踏み出した彼は正式な恋人として告白してくれたじゃないか…と、
自分に言い聞かせた。

じゃ、あの甘い声色の件は？

りりいとは？

それに関しては、未だに謎。

だけど、返事保留など出来なかった。

日にちをおいたら……いや、明日の朝になったら、豪華な馬車が、かばちやのボロ馬車に戻ってしまいそうです。

大丈夫。

大丈夫。

麻衣は、小さく深呼吸し胸を両手で押さえた。
幾分緊張が収まってくる。

「こんな私でよければ、よろしく願いします」

「ああ、大切にする」

翔がホツとしたように微笑み、麻衣の頭をポンポンと叩く。

くしゃくしゃと撫でると顔を寄せ、額にキスをした。

「麻衣ちゃん。何を見ても、何を聞いても、
ドライバーの僕だけを信じていて」

ちらちらとバックミラーから覗かせる運転手の視線を避けるように
頷く。

車は、弁当屋を50メートルくらい通り過ぎ止まった。

「また電話する。今度会うときは、タメ口じゃないと駄目だから」

ふたりの間を邪魔するみたいに、ドアが閉まった。

タクシーはゆっくりと発車し、翔の姿が流れてゆく。

まるで、主人を送り出す忠犬のように、麻衣は彼の後姿を送ったの
だった。

第26話 「正式な恋人」 (後書き)

今回も長文です〜 (内海)

第27話 「永遠にいつまでも」

「麻衣ちゃん、最近頑張っているわね」

なかなか褒めない本田が、最近良く褒めてくれる。麻衣は、新作の弁当の図案を本田に見せながら、照れくさそうに笑った。

「コンビニや大手弁当チェーン店に負けないように、個性を出したいと思っています」

図案を出したのは、フレンチ弁当。春に発売予定の弁当だ。

少しずつたくさん美味しいものを食べたい女性向けの弁当。彩りよいおかずと小さなデザート、去年、翔との初めてのデザートで食べたフレンチの彩のよさが忘れられなくて、弁当で表現してみた。

本田は、電卓を使ってカロリー計算している。

「彩り的にはいいんじゃないの。でも、これじゃカロリーオーバーね。」

お肉を白身魚のポワレにしてカロリー落としてみたらどう？

デザートも出来ればもう少しカロリー落としたいけど、何かある？」

「うん」

図案の上にメモを取りながら、

『簡単なフランス料理』という本をパラパラと捲る。

本田の痛いほどの視線を浴びていることに気がつき、上目遣いで彼女を見た。

「痩せて綺麗になったわね。小さなモデルさんみたい。もしかして、恋してる？」

『小さな』は余計な言葉であるが、

『綺麗になった』という言葉がなんだか嬉しい。

翔につりあうようにと始めた自宅ヨガと、
受験間近というのに夜な夜な教えてくれる麻由のお化粧レッスン。
だが、ほとんどは恋の力だろう。

翔と最後にあつたのは大晦日。

その日の朝、彼から電話があつた。

彼は電話口で「クリスマスは仕事で忙しくて連絡もできずにゴメン。
よかったら今日プレゼントを渡したい」と言った。

父の洋服も貸し出していたままだったし、

おせちの仕込みと予約制のオードブルをお客に渡してしまえば
夜半は時間が空く。

結局、翔は一足先に麻衣の自宅に出向き、

麻衣が帰ってくるまで妹達と3人紅白歌合戦を見ていた。

除夜の鐘が鳴ると、寝てしまった妹達を起こさないように彼と初詣
に出かけた。

参道を埋め尽くす人並み。

離れないようにギュッと手を握り合い。

先頭で彼が作ってくれる人の隙間を縫ってゆく。

雪は降らないものの寒い北風に震えながら、少しずつ少しずつ歩いた。

神様の前では、奮発して10000円投げ入れた。

いつもの家族の健康祈願の後、

「永遠に、いつまでも…翔と一緒にいられますように」と呟き、

翔との末永い縁を何度も何度も願掛けした。

彼と過ごせたのはほんの4時間ほど。

私が普通のOLだったなら、もつと長く一緒に居れたのに…

ハザードランプを数回点滅させ遠くなる彼の車を見送りながら、そんな現実化しない思いを持ちたりした。

彼からもらった小さな小さなピンクダイヤのピアス。

考え事をしていると無意識に触っている。

そんな姿を見られていたようで、本田が麻衣の髪を掻き上げ、意味深な笑みを浮かべた。

「どこで知り合ったの！お母さんに言いなさい」

「いえいえいえいえ…」

冗談交じりで探りに入った本田に、慌てて首を振った。
「たいした人なのだが、たいした人じゃありません」と言う。
「ちょっとだけ教えてとしつこく縋られ、仕方なくおおまかな翔のプ
ロフィールを言った。」

「23歳で、私より断然背が高く、優しく、頼りがいがある。」

「仕事は何してるの？」

母と同年の彼女、母が生きていたら同じ質問をしていたかもしれ
ないと思っていた。

やはり、後々の結婚を視野に入れた経済力の有無をみたいのだろう。

「うん」

俳優とは言えずに口ごもる。

仕事柄、身内と幸以外の周辺に彼の存在を話すことは、
止めて欲しいと言われている。考えた末にサービス業かなと答えた。

「サービス業ね。アバウトな言い方」

でも、本田はそれ以上追求することは無かった。

「母親代わりだから、心配なのよ」と言いながら、紹介できる日がきたら、会わせてねとサラリと流した。

「ん〜。こうやって探すとカロリーが低い洋菓子ってないわね」

本田は、弁当の話題に軌道を戻す。

彼女の横顔を見ながら、

1日も早く翔を紹介する日がきたらいいのにと思っていた。

交差点の曲がり角から見慣れた車の姿が見えると、麻衣は大きく手を振った。

店の反対側に止まった車から翔が降りてくると、

子犬のように駆け寄りたいのを我慢し、ゆっくりと彼に近づいた。

あくまで、ゆっくりよ。ご主人様に縋りつく子犬みたいじゃ駄目。

そんな立ち振る舞いじゃ、いつまでたってもキス止まり。

大人の恋に進展しないから

「大人の恋」

そんな甘美な言葉の響きにつつとりと陶醉する。

「ゆっくり立ち振る舞うのよ。ゆっくり」

それは、成人もしていない高校生から指示された言葉だ。

立場は逆転しているが、

恋愛に関しては十歩先を進んでいる麻由の言った言葉は、

恋愛素人にとって、まるで偉人の説法のようにも聞こえた。

成人式の式典のため、弁当屋の仕事は午前中であがらせてもらった。習った化粧を施し、麻由の友人の姉から借りたという高そうなスーツを身に着け。

幸のほか高校時代の友人と二次会まで楽しみ、夜になった今、ここにいる。

翔は、大きな瞳をさらに開け、驚いた表情で私を見ていた。

彼の表情に、どこか悪いところがあるのか心配になり自分の服装を再チェックした。

化粧直しもした、汚れたところもない。

どこをどう考えても、そんな大げさに驚くような姿ではない。ということとは、馬子にも衣装的なこの姿に…。

「驚いた……」

彼の第一声。

『大人風に』そう心で唱えながら翔の前に立つと、彼は丸い瞳を柔らかく細めて声をかけてきた。

「お化粧変えたんだ。大人っぽくて、すごく素敵だ」

予想通りに出た翔の言葉、心の中で麻由に感謝していた。化けると書いて化粧とはよく言ったもので、そんなことをあみ出した遠い昔の先人に脱帽する思いも湧いた。

大丈夫って！これでおねえちゃんも大人の仲間入りするわよ

今でも納得がいかないが、彼とえっちまで発展したら、妹にキーキバイキングをご馳走することになってしまった。今のところはいい感触であり、つい変な期待をしてしまう。へそくりの中身をちよつと心配しながら、大人風にゆっくりと口角を上げた。

「ありがとう。翔」

何度も練習したにもかかわらず、真から『大人風』などなれるはずもなく、

言葉を出すたびに背筋がムズムズと気持ち悪い。

翔は、その口調にも驚きながら「ちよつと待って」といい、後部座席のドアを開け、何かを取り出し麻衣の目の前に差し出した。

「成人おめでとう！」

それは、花束であった。

紅い薔薇を基調とした大きな花束。

あまりにも大きくて、麻衣の上半身がすっぽりと隠れてしまいそうであった。

突然のプレゼントがとつても嬉しくて、大人風を演じることをすっかり忘れていた。

「あ、ありがとう!!すっごく綺麗」

薔薇の香りを全て吸引するように鼻で長くにおいをかぐ。

高級なアロマのようなその香りに酔いしれ、感動のため息が出た。

「こんなの初めて。嬉しい!!」

愛しい翔をじっと見つめた。

尻尾を振りながら、大好きな主人を見つめる

子犬の目になっているのにはたと気がつき、がばっと俯く。

ち、ちがう!ここではなんて言えばいい?

『大人風』の気のきいた言葉を考えていると
クスツと笑った翔から肩を掴まれ引き寄せられた。

「成人したからって、無理に大人になることはないんだ。
自然体で言ってくれる言葉の方が、まっすぐ胸に入ってくる。今み
たいにね」

ギュツと抱かれると、薔薇を包んでいるシツクな包装紙が
胸元でカサカサと音を立て、無数の薔薇たちが苦しそうにひしめき
合った。

ふたりを分け隔てているその大きな花束の向こうで、翔は困った顔
をして苦笑する。

「これじゃ、キスも出来ないな…貸してくれる？」

薔薇が翔の手に渡った。

それは、ゆっくりと背中に回され。

ふたりの隔たりがなくなると、そのまま引き寄せられ
小鳥が啄ばみ合うようなキスをされた。

薔薇のアロマに、あまたのキス。

まるで、ロマンス映画のような熱いキスが降り注ぐ。
なんだかちよっぴり大人になった気分。
初めての体験が、麻衣を陶酔境とうすいきょうに浸らせていた。

第27話 「永遠にいつまでも」(後書き)

陶酔境……ほどよく酒に酔ったときや、うっとりするほど美しいものに
接したときなどの我を忘れた境地。

第28話 「しままじり」

「ほ、本当にいいの？」

「ああ、バタバタと出かけたから部屋は散らかっているけど」

「全然、大丈夫。片付け嫌いな妹の部屋を見慣れているから」

麻衣は、くるりと一回転すると

大理石風のエントランスをキョロキョロと見回した。

翔は集合インターホンに立つと、鍵を挿し込み自動ドアを開ける。機械音と共にドアが開くと、これからの新しい世界に胸が躍った。

彼は中に入ると、慣れた手つきで
集合ポストからダイレクトメールや手紙を取り出し差出人を確認する。
そして、宅配ボックスから箱を取り出すと口笛を軽く鳴らした。

それが、彼の日課。

当たり前のことではあるけれど、
こんなささいなことでも彼の日常が垣間見えて嬉しくなった。

「きたきた。お取り寄せのラスク。一緒に食べよう」

「ラスク、好きなの？」

「美味しいと聞いたものは、とりあえず取り寄せして食べてみるんだ」

「小麦工房ね。覚えておこう」

彼の好きなもののひとつに入るかもしれない。

麻衣の頭の辞書にその店名を刻んでおくことにした。

「じゃ、これ持っててくれる？」

さつき、スーパーマーケットで買い物したビニール袋が翔の手から
渡される。

それには、いろんな食料品が入っていた。

撮影が長引き、そのまま麻衣の所に来たとの事で

翔は夜ご飯を食べていなかった。

麻衣は、1次会からずっと飲み食いしてお腹いっぱい。

結局は、惣菜を買い、パスタが食べたいとのリクエストで材料を買い込んだ。

もちろん、作るのは麻衣だ。

家では何回か作っているカキとほうれん草のクリームパスタ。

好きな人に初めてご馳走する食べ物であり、失敗は許されなかった。

「綺麗なエレベーター。ホテルみたい」

翔の自宅は、新しいマンションのようでエレベーターも広くて綺麗だった。

エレベーターの中と外には防犯用なのかビデオが設置しており、自分たちの姿が映っている。

この中でキスなんかしようものなら、外に丸見えだと思う一方、低俗な思考に呆れてしまった。

エレベーターは最上階で止まった。

扉が開くと廊下があり、左右に一戸の家があるだけの贅沢なつくり。小さいながらも立派な門があつてその隅にはマウンテンバイクが、寄せてあつた。

いよいよ、彼の家へ入るんだ

麻衣にとって男性宅へ訪問するなど、生まれて初めてのことであつた。

本田のお宅にお邪魔するのは全く違う感覚にドキドキする。あともうひとつ、麻由の話が鼓動を激しくしていた。

翔兄さんのおうちに入り込めたら、100パー間違いないわね。絶対ケーキバイキングだから、よ・ろ・し・く

麻由が言ったことが本当だとすれば、今日私は、彼に抱かれることに？

妹の言った言葉が麻衣の心臓をあたり、足が踏み留まった。

「どうしたの？」

緊張が伝わっているようで、翔が声をかけてきた。

「いえ、門構えからうちと違うなあって思って驚いたの」

とっさに言った言葉だが、自分でもうまく誤魔化せたと思った。

翔は、そんな麻衣の心うちなど気付くことなく苦笑し

「おもちゃみたいな門だろう」と言つと、ドアを開けた。

「なにこれ！まるで2階建てのおうちじゃないの」

「でも、所詮マンションだからそんなに広くは無いよ」

所詮だなんて。

リビングダイニングルームに誘導された麻衣は、
小さな子供のように驚き見回した。

なぜか、部屋の中に階段があるのだ。

翔は、そのマンションのつくりをリゾネットだと言った。

ワクワクする気持ちを止められず

まるで冒険隊のように、階段を上がりひとつひとつの部屋をあけて
回った。

シアタールーム、来客用の寝室、小さな和室に…そして。

「あ、そこは僕の書斎兼、寝室」

「え」

寝室には入るつもりは無かったが、
思いつきドアを開けてしまっていた。

まるで、一流ホテルのようなブラウンのベッドスプレッドが目に入る。
部屋が広いせいで、キングサイズのベッドもなんとなく小さく見えた。

本が好きなのだろう。
ベッドの近くには、同じブラウンの本棚と机があり、
ベッドボードにも数冊の本が無造作に置かれていた。
翔は部屋に入ると、その本を本棚に戻した。

「男性なのに綺麗好きなのね」

麻衣がイメージした散らかっていると、

彼が言った散らかっているは極端に違っていた。

男性という足の踏み場も無いようなものをイメージしていて。

彼は何も言わないが、雑然と物が溢れていた我が家に驚いたことだろう。

「寝室はね、それなりに綺麗にしているよ。」

疲れて帰って来たとき布団がぐちゃぐちゃじゃ、安眠できないだろう

確かに、そうだ。

高校生の麻由にその言葉を聞かせてあげたいくらいであった。

「シートだって、毎日洗っている。」

でも、キッチンは朝の食器が洗いオケに浸かったまんまだ」

くすつと笑いが出た。

これで、キッチンもピカピカ綺麗だったら、
潔癖症かとちよつと引いていたかもしれない。

不完全な人間的な部分にホツとする。自分の出番、腕の見せ所だった。

「洗いのものは任せて、これでも弁当屋いち早く綺麗に洗うのよ」

「なるほど、それほど洗い場の仕事が長かったんだ」

「まあね！ていうか、そこは『凄い』って感動するところでしょ？」

素直に返事をして、慌てて突っ込みを入れる。

頬を膨らませる私をよそに翔は、お腹を押さえて笑った。

「いける！」

カキとほうれん草のパスタは、大好評であった。
パスタの湯で加減も味も完璧で。

日頃同じメニューを作っても、味が違う麻衣の料理に
妹達からはカメレオン料理人だと馬鹿にされ続けている。
だが、こんな緊張の中巧く出来たということは、
愛情の深さと程よい緊張感が料理を美味しくするコツではないかと
分析した。

「これじゃ、ワインが飲みたくなるね。飲んでもいい？」

「あ、どうぞどうぞ」

翔は、ゆっくり立ち上がるとキッチンへと移動する。
ワインセラーを開け白ワインを物色しながら、麻衣に声をかけた。

「麻衣ちゃんも飲むよね？」

「うん、私グラス出します」

「ああ、よろしく」

麻衣はスクツと立ち上がり、食器棚からワイングラスを探す。グラスを見つけ、つま先立ちし手を伸ばすと、後ろから再び翔が声をかけた。

「麻衣ちゃん、今日泊まるよね」

「は〜い!……えっ?」

カチャンと音を立てグラスが揺れ、倒れないようにグラスを支えた。泊まる誘いに大喜びで返事をしたのではなく、なんとなく言葉のノリで答えてしまったのだ。茹蛸のように熱くなる顔を翔に見せられず、そのまま立ち尽くしてしまった。

「いや、今日はそんなつもりじゃなくて……」

心の半分強は、そんなつもりがあったはずなのに、そんなことは言えるはずもなく。一応曖昧に答えてみた。

翔が自分の後ろに立ったのが、その気配で分かった。麻衣の手よりも高いところに軽々と彼の手が現れ、

グラスをふたつ手に取った。

「飲んだら乗るな…でしょ？地下鉄は…動いてるけど、そんなに帰りたいたい？」

「いえ、帰りたくない…です」

最終的な言葉が彼にどう伝わったか分からないが、あとは、流れに身を任せるしかなかった。

「じゃ、ゆっくり飲もう」そんなことを言いながら肩を叩く彼の声も、

なんだか緊張しているように感じた。

「わあ、これが台本？書き込みが凄い」

現在、撮影が進んでいる『ひだまりのうた』の台本。
無理言って見せてもらった。

赤い線が入っていたり、たくさん書き込みが入っていたり、
翔の役に対する意気込みにかなりの熱心さが伺えた。

もつと小説っぽいのかと思っていたが、実際は会話と大まかな場面
だけ。

この情報だけで、よく感情移入ができるものだと感じた。

「おっと、中身を見るのは、それまでにしてくれよ。
楽しみがなくなるから」

「え〜」

じっくり読もうとしたら、翔から台本を閉じられてしまった。
ブライングを起こすが「だめー」と強調される。

「僕が出るんだからもちろん見てくれるでしょう？
読んだら、楽しみが半減するじゃないか」

「それも、そうだけど」

じゃ、原本を読んだ人はどうなるの？と心で突っ込みを入れながら、
名残惜しそうに『ひだまりのうた』の表紙を穴が開くように眺めた。
シンプルな製本。

題名の横には監督の名前と著者名が書かれてあり、その著者名で目
が止まった。

忘れそうになっていた名前をこんなところで見るとは予想もしなかった。

麻由が言っていたドラマの内容と重なり、ようやく彼女の存在がはっきり見えてきて。

翔との関係も、あの甘い声色の意味も分かりかけた。すると、なんだか憑き物が取れたみたいに心が楽になった。

翔は、月9のドラマで、上条リリカが書いた闘病記のドラマを演じるのだ。

私にりりいと言ったのは、ドラマのワンシーンだったという訳か。

「翔って、凄く酔っちゃっても役者魂が消えないのね」

キョトンとする彼を肘で突付くと、安堵のため息をついた。

よかったよかったと何度も連呼すると、翔から引き寄せられ耳元で囁かれた。

「何？独りで納得しないで教えてよ」

「いやよ。言っちゃったら笑われそうだし」

「笑わないよ」

「えー」

迷った挙句、本当に笑わないでよと何度も念を押して話し始めた。

麻衣の家に泊まったあの日、酒に酔った翔が麻衣を見て「りりい」と呼んだこと。

翔が麻衣を上条リリカに似ていると言っていたことを思い出し、上条リリカが翔の恋人で、麻衣にその姿を重ねたのではないかと思ったと話した。

笑って、馬鹿だなあと言われる事を想像していた。

だが、翔の反応は意外で。

彼は真剣に…というよりも、切なげな表情で麻衣の話聞いてくれたのだ。

いつものように軽く笑い飛ばして欲しかったのに……。

他愛も無いことを重くとらえてしまった彼。

その彼に対して、申し訳ない気持ちでいっぱいとなった。

「ごめん…そんなこと、僕は君に言ったんだ」

「なによ。翔、そんなにマジにならないで」

ソファアの上でギュツと抱きしめられると

麻衣は、翔の背中を何度もポンポンと叩いた。

「酔っている時まで仕事してるなんて凄いことよ」とフォローにもならない言葉で彼を慰めた。

やはり、そんな言葉も効果がないようだ。

翔の背中は泣いているような気がした。

「違うんだ。麻衣ちゃん」

彼の言葉にドキツとした。

何が違うのと問いかけようとした時、

マンションの非常ベルがけたたましく鳴り響いた。

なかなか鳴り止まないベル。

それは麻衣の不安をも煽^{あお}った。

「ちょっと待ってて」

翔は、離れがたそうにのろのろと麻衣の体から離れた。

「ちょっと見てくる」そう言って、リンリン鳴り盛る廊下へと出て

行った。

何が違うと言うのか？

不安は不安を呼び始めた。

空になったグラスに残りの白ワインを注ぐと、グツと飲み干した。

早く帰って来て欲しかった。

早く帰ってこの心の曇りをすっきり晴らして欲しかった。

非常ベルは、何事も無かったように消えた。

ホツとしたのもつかの間、電話のベルが鳴り始める。

それは5回コールすると自動的に留守電に切り替わった。

「只今、出かけております……」

抑揚の無い女性の声が留守を告げる。
出来るだけ耳に入れないようにしながら、お菓子を頬張った。

留守番メッセージが終わると、

一呼吸置いて中年女性の声が聞こえてきた。

『あ…翔さん』

『……上条りりカの母ですが……』

女性は、そう言った。

第29話 「『りりい』の正体」

留守番メッセージが終わると

一呼吸置いて中年女性の声が聞こえてくる。

『あ…翔さん？上条リリカの母ですが…』

女性は、そう言った。

驚きでうるたえる自分がいた。
どうしてまた上条リリカなのか？
……いちいち不安にさせるそのフレーズにイライラした。

『翔さん、夜遅くにごめんなさいね。まだ、お仕事なのかしら』

上条リリカの母親と名乗る人は、優しくて上品な口調。

その声を聞いていると、その娘を取り巻く環境が手に取るように分かる。

『5月に……リリカの3回忌法要をとり行うことになりました。だけど、今回は身内だけでひっそりしたいと思っているの。いつも、お参りに来てくださってるあなたにこんなことを言うのは失礼だと思われそう……』

脳がしきりに囁いていた。

『何を言っているの？おかあさん』と。

ドラマの最終話は『主人公の死』なのか？

まだ見ていないはずのドラマの続きを見ている気がした。

この電話は、ドラマの予行練習なのかと。

パタンと音がして、翔がリビングに入ってきた。

麻衣の呆然とした表情に気が付いたようで、彼は慌てて歩を進めた。留守電が作動していて、その向こう側で涙声の女性の声が聞こえる

と、次第に翔の表情が硬くなっていった。

『……だけど、もう3回忌法要には来ないで下さい』

その言葉を聞いた彼は、全ての事を理解したようであった。グツと握った拳を緩め、背後から麻衣の肩に乗せる。その肩をぎゅっと掴むと苦しそうに呟いた。

「……どこにも行くな」

翔はそういうと、まだ話し続ける電話口へと向かった。

『突然こんなことを言って、ごめんなさい。』

リリカが亡くなって2年も経とうとしているのに、いつまでも、リリカの思い出が残るあなたに縋るのはいけないことだと

主人に言われたの。あなたは、何も言わずに私達夫婦を支えてくれた。

本当に感謝しています。リリカが出した本がドラマ化され、相手役があなただと聞いた時、もっと反対すればよかった。

…リリカの本当の恋人が、ドラマの相手役を演じなければいけないなんて

残酷過ぎるわよね』

涙が溢れ出した。

嗚咽を止めるため、手で口を覆った。

翔の姿が涙でぼやけ、堪えても堪えても出てくる嗚咽が麻衣を呼吸困難に陥らせた。

麻衣は全てを理解した。

上条リリカは、月9のドラマ『ひだまりのうた』の原作者で、青井翔は、癌に侵された彼女を献身的に支えた恋人であったのだ。

307

そつ。で、僕がその男性役。

献身的なところが適役でしょ？麻衣ちゃん

彼は、どういう気持ちであんなことを言ったのだろつ。

300万部のベストセラーになった『ひだまりのうた』はドラマ化され、

青井翔が相手役として抜擢された。

そして再びリリカとの愛の軌跡を演じるというのだ。

麻衣は震える手で、見るなと言われていた台本を手に取った。それをパラパラと開くと読み始める。

その中には、上条リリカ、青井翔という名前は無く別名で設定されていた。

りりい……。

あの甘い囁きは演技ではなく、

私に重ねられた本物の上条リリカへ呼びかけられたものだった。

彼の意識の中にまだ上条リリカは生きている。

そう思うと目の前がくらくらまわり、闇が現れ、引き込まれそうになっ

第30話 「夢から現実へ」

「お母さん、翔です」

母親の声が入ると消えると、翔の声が室内に響いた。その声を追いかけるように視線を向けると、大きな彼の背中が見える。

逃げ出したくなった、今すぐに上条リリカの話など、彼の口から聞きたく無かった。

「残酷だなんて思っていません。リリィがあの本で伝えたかったこと、

ドラマでより多くの人に届けることが出来るじゃないですか。僕は、毎回そう思って必死に演じています」

また、彼が『りりい』と呼んだ。

自然な響き、甘い声色。

子供を呼ぶような『麻衣ちゃん』とは大きく違っていて、彼女との絆の深さを感じた。麻衣は、テーブルにあった自分の携帯をバッグに入れる。掛けてあったコートを取って羽織った。

彼との出会い。彼から誘われた初めてのデート
初KISSが、走馬灯のように脳裏に過ぎてゆく。

翔は、……君の事は凄く気になっていたみたいだね。
『今日のプレミアシートは、”上条^{かみじょう}リリカ”似の子』
って言っていたんだよ

それが愛だとして、恋人として君を受け入れて本当にいいものなのか。

正直迷ってる。僕自身の問題でね

飛鳥の言葉が、翔の言動全てを上条リリカと関係付けていった。

「あと、3回忌法要は、ご迷惑でなければ参加させていただきたいと思って……」

出て行くこうとする麻衣の姿に気が付いたようで翔が言葉を止めた。行くなと言わんばかりの表情が手に取るように分かる。

だが、麻衣は泣きはらした顔をクシャツと歪めペコリとお辞儀した。

元彼女の法要に行くんだ……そうですよね。

嫌いで別れた訳じゃない。死がふたりを別つただけですからねわか

もっとももっと酔っていたら、そんな皮肉なひと言も掛けられたらどうか？

いや、きつと掛けれないだろう。

そんな自分が嫌だった。

強い振動と共にボタンと玄関の扉が閉まり、ビクツと肩が震えた。翔が言っていたおもちゃみたいな門を開けると、ついさっきまで彼に抱かれる夢を見ていた自分を思い出した。夢から覚めた自分の姿が真っ暗なエレベーターの覗き窓に映っている。

「私……みじめだわ」

エレベーターの降りるのボタンを、壊れそうなくらいにバンバン押した。
早く、一刻も早くこの場所から立ち去りたかった。

第31話 「隔たり」

泣きじゃくりながら、公園に来ていた。

地下鉄を探すがどこが見つからず公園に迷い込んでしまったのだ。

この寒い中でも公園にはカップルがいっぱいいて。

不幸オーラを放っている自分は場違いな感じがした。

「どっしよっし」

さすがに、イチャイチャしている人たちの間に割りこみ

『地下鉄はどこ』とは聞けず、

困った麻衣は一旦大通りに戻ろうとした。

だが、その視線の先に息を切らして走ってくる翔の姿が見えたのだ。

思わず脱兎のように走っていた。
彼にこんな哀れな顔を見せたくなく、
あの女性の陰がつきまとう彼の姿も見たくなかった。

コンクリートにヒールが激しく当たり、
カツカツと音が大きく耳に入ってくる。
高級スーツは運動用に出来てるはずもなく、
ちよっぴり高いヒールのブーツは走るためのものじゃない。
それらは麻衣の走りを邪魔をし、酔いも手伝ってか最後は足がもつ
れた。

倒れると思った。

「きゃっ」

だが、小さな叫び声と共に、
力強い掌が麻衣の腕を掴みグイッと引き寄せたのだ。
彼の胸の中に納まると同時に、条件反射のように掌で顔を覆う。
その手は無理矢理引き剥がされた。

「麻衣ちゃん」

「どうして、どうして私なんですか？私、彼女と似てるんでしょう？
亡くなった元恋人の面影を重ねていたかったんですか？」

一步踏み出すなら、上条リリカと全く違う顔の人物でよかつたはずだ。
なにも、亡き人の面影をもった自分を選ぶことはなかつたんじゃないか。

麻衣の言葉は、翔の心を突いたのだろう。

一瞬瞳を大きくした彼であつたが、すぐに目を細め棘のある表情に変わった。
以前こんな表情を見たことがあつた。

「君に上条リリカの面影を重ねていないと言つたら嘘になるかもしれない。

それでも君と一緒に居たいと思つて告白した。いけないか？」

「うつつ」

面影を重ねられたショックよりも、

一緒に居たいといつてくれた嬉しさが勝っているのか？

…こんな状況にもかかわらず、自然と胸高鳴る自分が情けなく。

「君に、全てを話す。聞いてくれないか？」

翔からギュツと手を握られた。

冷たい手。

素手で握られているにもかかわらず、

なんだか蠟人形から握られているような違和感を感じる。

まるで、姿のない上条リリカがふたりの間にいるような、
彼との隔たりを感じたのだった。

第32話 「婚約者」

麻衣は、翔の家へと戻っていた。

翔は、湯気が湧きあがるマグカップをテーブルの上に置くと、「飲んで」と言った。

それは、温かいリキュール入りのミルク。

冷え切った体を温めるには十分なものだが、心まで温かくしてはくれなかった。

「上条リリカは、僕の婚約者だった」

ふたりは、婚約中だったんだ。

想像するだけでも神聖すぎて自分の入る隙など無いような気がした。翔は、書斎から本を持ってくるとテーブルの上に乗せた。

テーブルに置かれたもの。
それは、『ひだまりのうた』の原作本。

表紙には、パステルで描かれた、
白いベッドと窓から入ってくる太陽の光が温かいタッチで描かれて
あった。

その裏には上条リリカのサインが入っていて、”愛する翔”へと書
いてある。

麻衣は躊躇するも、震える手で本を開いてみた。

最初の十数ページに渡って写真集のように生前の彼女の写真が載せ
られていた。

モデルをしていた頃のものだろう。

麻衣の小学生のような体型とは違った長身でスラリとした彼女は、
アイドルスマイルでモデル立ちをしてポーズを決めている。

あと、スナップ写真のような自然な笑みをたたえるアップの写真も
載せられていた。

上条リリカの顔をこうやって見るのは初めてであった。

確かに、彼女の顔の感じは麻衣とよく似ていた。

目、口元、顔の輪郭、そして、黒いストレートの髪。特に麻由から習いお化粧をしていた頃の自分とは、気持ちが悪くなるほど酷似していた。成人式の日、自分の姿に驚く彼の表情が思い出される。

「こんなに似てるなんて…」

「ああ、よく似ている」

翔は、麻衣と向かい合わせに座るとマグカップに口をつけた。相変わらずお互いの間には隔たりがあり、彼の視線も険しかった。

「こんな形で君を傷つける前に、彼女のことを言っておくべきだった」

彼はそう言つと深いため息をついた。

「彼女とは大学で出会った。モデルという共通の仕事をしていただけ、付き合うまでにそう時間はかからなかった。」

明るくて賢い彼女。モデルとして人気があったのも、容姿だけではなく誰からでも好かれる性格だったからだと思う。

出会って1年、お互いが結婚を意識していた。だが、学生だし特に僕はモデルとしても半人前だったから結婚の約束も出来ずに……そんな中、彼女の病気が発覚した」

上条リリカは、卵巣がんだった。

発見した時には時すでに遅く、周辺の臓器にまで転移していたという。

その臓器を全て取り除けたとしても余命を延ばすだけ、
ただ彼女の両親も翔も余命を伸ばし

なおかつ億分の一の治る奇跡を願わずにはいらなかった。

全ての臓器をとれば治る、例えば子供が産めない体になったとしても生きてゆけるのだと彼女に伝えた。

「彼女がこの世からいなくなるなんて想像も付かなかった。

他のがん患者とは違つと。強力な運の持ち主でもある彼女は

必ず生き続けると信じていた。だから、手術を受ける2日前にプロポーズして、

記載済みの結婚届を彼女に手渡したんだ」

彼女がかわいそうだからか、それとも翔から結婚届を渡された彼女への嫉妬なのか

大粒の涙が止まらなくなる。

「ごめん…傷つけてばかりだな」

麻衣は本に視線を落とし、次のページ、次のページと開いていくと、病魔に侵されゆく彼女の姿を見た。

次第に痩せ、抗がん剤の副作用か

長いストレートの髪だった頭には毛糸の帽子がきっちり覆い隠される。

眼窩も窪み、酸素マスクを着けた彼女の姿に

読む前から胸が痛くなるようだった。

それでも、彼女は笑顔を絶やさずに写っていた。

だが、最後のページを開いた指はガチガチになって動かなくなってしまうのだ。

その写真は、上条リリカと恋人であろう人が寄り添って笑う写真だった。

病院の庭先だろうか。

木漏れ日の中で酸素マスクをつけた上条リリカが車椅子に乗り、

その横で、彼女の背の高さに屈んで寄り添う男性がいた。

もちろん、相手の男性の顔にはぼかしが入っている。

顔の分別は付かないが、体型からしてそれが翔であることは間違いないなかつた。

その写真の横には、彼女の直筆でこう書いてあった。

「生きる力とたくさんの愛をくれた大好きな人たちを、
これ以上悲しませたくはありません。

自分の運命を呪いながら生きるのではなく、

最期の最期の1秒まで前向きに生きることを選択しました』

日記から抜粋されたひと言であった。

翔は、彼女にどれだけの愛を捧げてきたのか？

彼女のこのお釈迦様のような言葉から惜しむことなく注がれた愛情を感じ、

嫉妬で気がおかしくなりそうだった。

目に見えぬ亡き女性に嫉妬しても無意味だとは分かっている、胸が苦しくて苦しくて潰れそうになった。

「その写真は、僕だ。彼女が亡くなる2ヶ月に撮ってもらった……

きっと彼女は自分の死期を悟っていたのかもしれない。

彼女が亡くなった後、判子だけが押されてない婚姻届が病院のベッドの枕の下から見つかった」

翔は、ゆっくりと立ち上がる。

コーヒーの立ち上る香りに引かれる様にキッチンへと進んだ。

第33話 「ふたりを別（わか）つ電話」

翔は、ゆっくりと立ち上がる。

彼は、コーヒーの立ち上る香りに引かれる様にキッチンへと進んだ。

「君と出会ったのは、上条リリカが亡くなって1年過ぎた頃だった」

彼と出会った日、公園で突然手を引かれたときの情景を思い出した。
何かに追われる様に走ったまるで逃避行のような自分らの姿が懐かしい。

…と言っても始めは強盗だと怯えていたのだけれど。

「モンスターの公演前に、僕が「ひだまりのうた」の主演に抜擢されたことを知った」

あの日、ドラマの出演依頼に監督じきじき挨拶にきたのだと言った。もちろん、断った。再びあの悲しみを演じるなんて出来なかったからだ。

だが、監督はOKを出すまで何度も通うと言いつ張った。翔がその悲劇の当事者だと知らないはずなのに、しつこく食い下がったのだ。

『他の誰でもない、君なら演じれる。彼女がこの本に託した思いを君らで演じて欲しい』
監督はそう言った。

監督はリリカの本を読んだ時、まるで天から光が降りこむように

彼女のメッセージが心に入ってきたのだと言った。健康を過信せず、自分の体と心のメッセージを聞き、検診を受けること。

監督自身初期の癌を患った経験もあることから、独りでも多くの人にこのメッセージを映像で伝えたいと思ったのだ。

「だが、僕は、演技とはいえ彼女の死に再び向き合う自信が無く、答えを出せずにいた」

監督が帰った後、翔は劇場を抜け出した。変装もしないまま、外に出たためファンから見つかり追いかけられた。

「そこで、君と出会った」

大きなビニールを両手に持ち、お使いを頼まれた子供のような麻衣が目に入ったのだ。

「一生懸命さがなんだか可愛くてね。どんな子か気になったんだ。

僕は君に近づいていった。だけど、君の顔が少しずつ見えてきて、ハッとした。リリカだと思った。その時は慌てて眼鏡もしていない状態だったから、本当に彼女と思ったんだ。捕まえてないとまたひとりで逃げてしまおうと思い、とっさに僕は君を捕まえた……」

ふと訪れた室内の静けさに
気持ちこそわさわし始めた。
いよいよ核心部分に入る。
その後の彼の言葉が何と発せられるのか？

君に上条リリカの面影を重ねていないと言ったら嘘になるかも
しれない。
それでも君と一緒に居たいと思って告白した。いけないか？

亡くなった元婚約者の面影を重ねながらも
それでも麻衣と一緒にいたいと言ってくれた
彼の心の内がこれから分かるはずだった。

だが、その話は、鳴り響いた電話の音によって破られることとなった。
翔との溝を生むことになったこの電話の音に、なんだか気分が落ち

込んでいく。

この電話が、彼との距離をさらに遠ざけるんじゃないか……そんな予感が

心を占めていった。

翔は、困ったように顔を歪めた後、しぶしぶ受話器を手に取った。そして、数回相手の話を聞くように返事をしたあと、彼の表情から血の気が無くなっていくのが分かった。

「容態は……どこの病院？……ああ、すぐ行く。落ち着いて、今行くから」

電話を切ったまま、翔は何かを思い出すように一点を見つめた。

大切な誰かが病院に運ばれたのだと察し、自分はこのを出るべきだと思った。

麻衣は、マグカップを手に取ると立ち上がった。

「私……帰ります。どなたか病院に運ばれたんでしょう。すぐ、行かないきゃ」

「あ、ああ」

翔は、我に返ったように麻衣の手からマグカップを受け取り答えた。

「リリカの母親が自殺を凶って、病院に運ばれた。昏睡状態だそうだ」

「え！なぜ？」

さっきまで彼と話していた彼女の母親の声が思い出された。

翔は3回忌に行くと言っていた。麻衣の存在も知らないはずなのに自殺の原因が分からなかった。

翔は、マグカップをキッチンに置くとバッグを手に取り電気を消してゆく。

足元だけに光る間接照明がふたりをぼんやりと浮き立たせると

麻衣は、翔の後を追って玄関へと向かった。

彼の背中越しに声が聞こえてくる。

とても低く生気のない声だった。

「夫から『もう僕に縋るな』と言われても、リリカの母親としては、心の整理が出来ていなかったんだ。

だから、僕がリリカから離れる事実を知りショックを受けた」

「えっ？」

麻衣がああの部屋を出た後、上条リリカの母親と

翔の間に起こった事が想像できた。

ふたつの立場に挟まれ

翔の背中が泣いているような気がした。

彼は、立ち止まった。

「僕は、リリカの母親に言ったんだ。

『3回忌が終わったなら、墓前でリリカに話そうと思っていました。新しい道に踏み出すことを許してくれ』と

麻衣にとって、安心させてくれる言葉を伝えてくれた翔。

だが、素直に喜べるはずはなかった。

変わらず、彼の背中はずぐそこにある。

少し手を伸ばせば触れる距離なのに

手が届かない、その背中は、とても遠いところにあるような感覚に陥った。

第34話 「別れ」

翔の自宅から病院に行くまでの道のりは、
途方もなく遠く感じた。

彼と離れたくない気持ちからなのか
それともさつき彼が発した

距離を置いよう……。

という、言葉のショックに時間が止まってしまったからか。

「ここまでしか送れなくてごめん」

翔の声で我にかえり、外を見ると車は病院の裏口に横付けされていた。

「大丈夫、ここから、5分くらいしかかからないし。ありがとうございます…早く行ってあげて下さい」

彼が心配しないように精一杯の笑顔を作りながらシートベルトを外す。ベルトが離れずにもたつけば少しでも彼との時間が稼げたりしてと、悪意的な気持ちも出てきたりしたが
真新しいベルトは、無情にスルリと体から離れていった。

「じゃ…」

なんだかバイバイも言えずに、名残惜しそうに言つと、翔は同じ言葉返してくれる。
だが、無言の時間が流れた後、彼は続けた。

「さよなら…元気で」

背中から彼の言葉が聞こえると、ハツとした。

『距離を置こう』から『さよなら』となった彼に、道中の彼の迷い、そして、苦渋の決断を感じた。

上条リリカの母親の意識が戻れば、彼と会えるかもという、したたかな気持ちは打ち砕かれた。

「あなたも。……気をしっかり持って」

「ああ」

別れの言葉に肯定も否定もできなくて体を気遣う言葉だけしか言えなかった。彼の顔を見ないまま、車から降りる。車のエンジンの音が聞こえなくなると、病院とは逆の方向へと歩き出した。

あの日を最後に、私と翔の関係は切れた。

私は、1週間ひとりになれば泣くを繰り返した。

人間ってこんなに涙が出るものだろうかと思議に思っくらい。化粧をしても目の下のクマと顔の腫れは治ることなく。

ご飯も食べれず2キロくらい痩せた。

涙もろさは1ヶ月ほど続いた。

だが、どんなに泣いても、あの彼との最後を思い出しても翔を諦めることも出来ず、結局はそつと彼を想い続ける事で自分の気持ちを治めた。

日々の生活を平凡に過ごしていけば、

時間が彼の事を忘れさせてくれるだろうと期待した。

第34話 「別れ」 (後書き)

第32話 第33話 同じ話を載せてしまっていました。

本当にごめんなさい。訂正し続きも更新させていただきました。

教えていただいたお客さま、ありがとうございました。

感謝でいっぱいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4684i/>

通りすがりの恋人

2011年2月1日04時05分発行